番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
16	高台付坏	－	(2.3)	(6.0)	BEI	I	灰　色	25	№34
17	高台付坏	－	(1.8)	(5.8)	BEIJ	II	灰褐色	15	
18	高台付坏	－	(3.2)	(6.0)	BEHI	III	黄灰色	20	№4
19	高台付坏	－	(2.1)	(6.2)	BEHI	II	灰褐色	20	№39
20	高台付坏	－	(2.3)	5.8	BEIJ	II	灰褐色	70	
21	土師器甕	19.6	(6.8)	－	BEHIJ	I	明褐色	15	
22	土師器甕	22.0	(8.8)	－	ADEG	II	明褐色	20	№37
23	土師器甕	20.0	(6.1)	－	ABEG	II	暗褐色	40	№6
24	土師器甕	－	(24.1)	5.1	ABEGI	I	暗褐色	20	№15・30
25	灰釉長頸壺	－	3.8	8.8	BE	III	黄灰色	45	
26	平　瓦	－	－	－	ABE	III	褐　色	－	
27	土製紡錘車	長 6.8	幅 6.2	厚 1.2	ABEG	I	褐　色	－	

第３号住居跡（第30図）

本住居跡はD・E－10グリッドに位置し、２区の南部に存在する。

平面形はひしゃげた隅丸方形を呈し、規模は東西3.4m、南北3.6mで、深さは0.36mある。カマドを基準とした主軸方向はN－81°－Eを示す。

住居跡の掘り込みは浅く、壁ではほぼ直立する。覆土は自然堆積と考えられる。

カマドは東壁のほぼ中央に設置されている。燃焼部は比較的よく焼けており、カマド土層断面の第３層が天井崩壊土である。煙道部は壁を掘り込んで構築されている。袖の存在は明確でなかった。

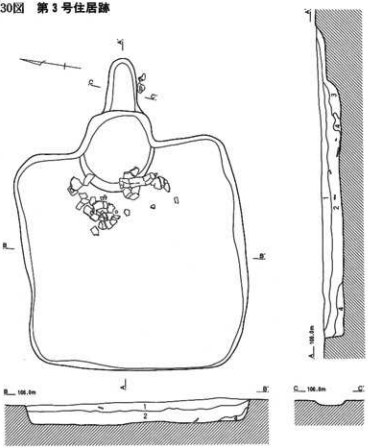
床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。柱穴と壁溝は確認されなかった。

遺物の多くは覆土第２層中から出土しているが、原位置で出土したものはカマド燃焼部前面に集中しており、大甕の底部と体部がつぶれた状態で出土している。

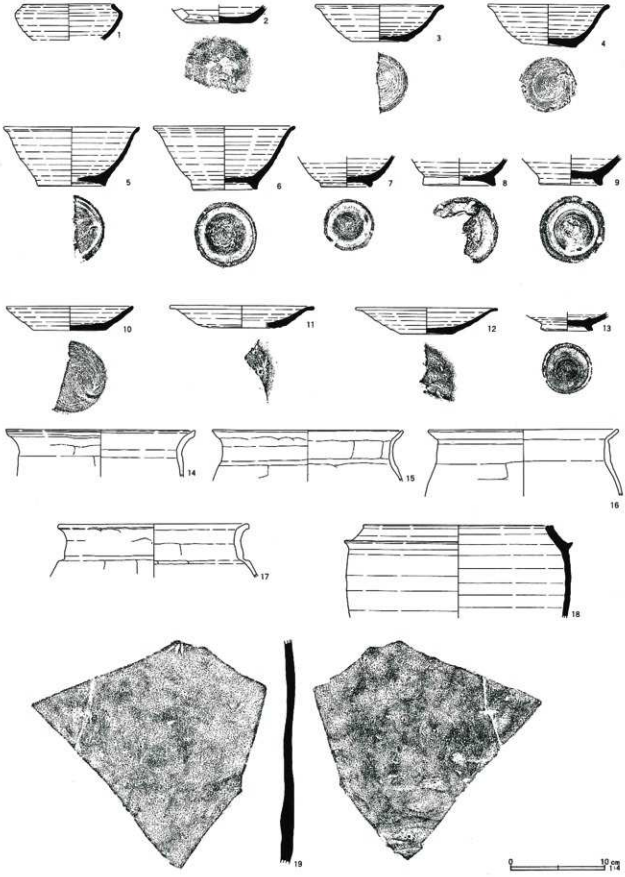
出土遺物には須恵器坏、高台付椀、皿、甕、無頸壺、瓦、土師器甕があり、器種が豊富である。

なお、鉄鉢形と羽釜は混入であろう。

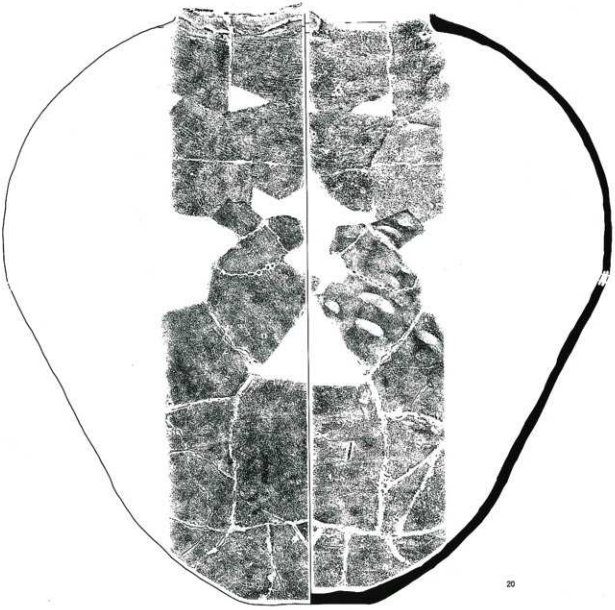
第30図　第３号住居跡



第31図　第3号住居跡出土遺物（1）



第32図　第３号住居跡出土遺物（２）



第３号住居跡出土遺物観察表（第31～32図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉄鉢形	(9.8)	(3.8)	－	BEIJ	Ⅰ	灰色	25	
2	坏	－	(1.9)	(7.0)	BEIJ	Ⅱ	淡灰色	25	
3	坏	(13.6)	3.9	(6.0)	BEI	Ⅱ	淡灰色	30	
4	坏	13.0	4.5	5.8	BEHI	Ⅰ	灰色	60	
5	高台付椀	(14.4)	6.3	(7.2)	BEGI	Ⅱ	淡灰色	40	
6	高台付椀	(15.1)	6.8	(6.9)	BEGI	Ⅲ	黄灰色	30	
7	高台付椀	－	(3.3)	5.5	BEGHI	Ⅱ	灰褐色	50	
8	高台付椀	－	(2.9)	(7.7)	ABEI	Ⅲ	褐灰色	10	
9	高台付椀	－	(3.3)	(6.9)	ABEG	Ⅲ	灰褐色	30	
10	皿	(13.5)	2.5	(7.6)	ABEGH	Ⅲ	褐灰色	20	
11	皿	(15.3)	2.3	(7.0)	BEJ	Ⅰ	青灰色	15	
12	皿	(15.0)	2.8	(5.6)	ABEI	Ⅲ	黄灰色	20	
13	高台付皿	－	(2.0)	5.5	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	70	
14	土師器甕	(20.0)	(4.9)	－	DEGH	Ⅲ	褐色	10	
15	土師器甕	(20.0)	(5.4)	－	BDEG	Ⅲ	褐色	40	
16	土師器甕	(20.0)	(7.0)	－	BDEH	Ⅲ	明褐色	20	
17	土師器甕	(20.0)	(5.6)	－	ABDEG	Ⅲ	褐色	15	
18	羽釜	(20.0)	(9.8)	－	BEHJ	Ⅰ	灰色	15	須恵質、ロクロ成形
19	甕	－	(23.6)	－	ABCI	Ⅲ	黄灰白色	－	
20	甕	－	33.5	14.2	ABCI	Ⅲ	黄灰色	25	
21	丸瓦	－	(9.6)	－	EHI	Ⅱ	淡灰色	－	
22	平瓦	－	－	－	BEH	Ⅱ	淡灰色	－	
23	平瓦	－	－	－	BE	Ⅱ	黄灰色	－	

須恵器鉄鉢形（1）

残存率が低く、もう少し大きくなる可能性がある。口縁部は内屈し、端部が僅かに立ち上がる。

須恵器坏（2～4）

2は底径が大きく、底面と底部縁に手持ちヘラケズりを加えている。3と4は体部が張り、口縁部が強く外反する坏C類である。口径はともに14cm弱であるが、底径が口径の2分の1を下回っている。底部は回転糸切り離しが行われている。

須恵器高台付埦（5～9）

体部の張りが弱く、口縁部が僅かに外反するB1類である。高台は直立し断面形が逆三角形を呈する。5に比して6は高台が高く、高台部の調整が丁寧である。

須恵器皿（10～13）

10は浅い坏状の器形をとる平底、直口の皿で、酸化焔焼成によりにぶい橙色を呈する。B1類に属する。11は口縁部が水平に開き、端部を丸く収める。12は上底であり、A′2類に属す。11に比べて薄手で器高が高い。13は高台付皿となろう。内底面に重ね焼きの溶着がある。酸化焔焼成によりにぶい黄橙色を呈する。

土師器甕（14～17）

14は口縁部が頸部から緩やかに外反する甕である。口唇部を摘み出し、凹線が巡る。15～17は武蔵型甕であり、コの字状口縁を持つ。頸部は直立し、口縁部が外方へ屈曲する。15と16は頸部と体部の境界が不明瞭なのに対して17は器形を屈曲させて明瞭な段を形成している。やや厚手で、口縁部は短い。体部外面は横位のヘラケズりが施され、器肉が薄く仕上られている。

須恵器羽釜（18）

口縁部が内傾し、直下に短い鍔が付く。内外面にはロクロ目が付く。

須恵器甕（19・20）

20は復元胴部径64cmを測る大甕である。小さな平底を持つ。平行叩きの後、叩き目を撫で消している。内面には無文当て具痕が認められる。明赤褐色を呈する酸化焔焼成品。

瓦（21～23）

21は丸瓦、22と23は平瓦である。凸面叩き成形の後ヘラケズりを施し、平瓦では側面上側角の面取りを加えている。凹面には布目が付く。

（2） 窯　跡

第１号窯跡（第33～35図）

Ｃ－４・５、Ｄ－５グリッドに位置し、２区の北部に存在する。第１号墳の周溝外側立上り部を掘り込んで、焚口が築かれ、窯体は周溝外に延びるが、灰原は周溝内に広がっている。

窯跡の形態は舟形で、焚き口に楕円形の前庭部が取り付く。規模は全長4.38m、下場での焼成部最大幅1.38m、燃焼部幅0.84m、深さは確認面から1.59mであった。主軸方位はＮ－33°－Ｗである。

前庭部は、焚き口部の前方に付設されており、一段高い。平面形は楕円形で、主軸が窯体と一致せず、西側に偏していた。規模は幅2.70m、長さ3.00m、深さ0.15mを測る。床面は、良く踏み固められていた。

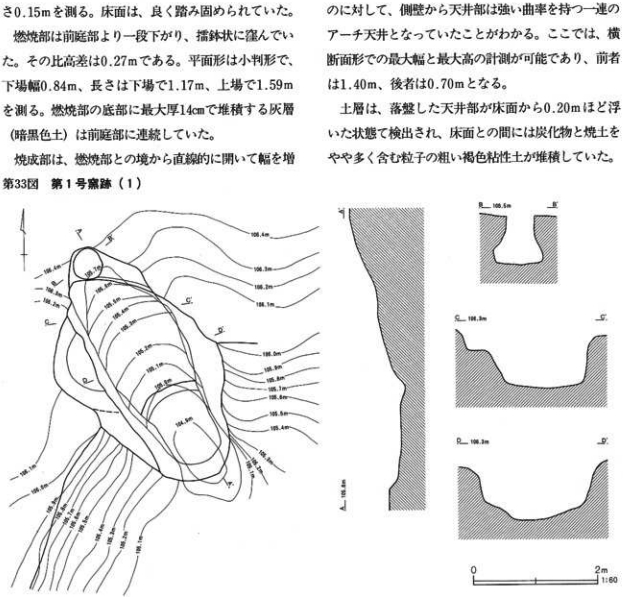
燃焼部は前庭部より一段下がり、擂鉢状に窪んでいた。その比高差は0.27mである。平面形は小判形で、下場幅0.84m、長さは下場で1.17m、上場で1.59mを測る。燃焼部の底部に最大厚14cmで堆積する灰層（暗黒色土）は前庭部に連続していた。

焼成部は、燃焼部との境から直線的に開いて幅を増し、窯尻付近まで一定の幅(1.20m)が確保されている。最大幅は燃焼部との境界から0.42mの位置にあり、1.38mを測る。この付近での燃焼部の傾斜は緩やかで、19°である。0.5mほど奥には小さい平場が作られており、いったん立ち上がってから再び小さな平場が作られている。窯詰めのための便宜から作られたものと考えられる。焼成部の平距離は2.40mであるが、斜距離では2.56mとなる。平均勾配は19°である。

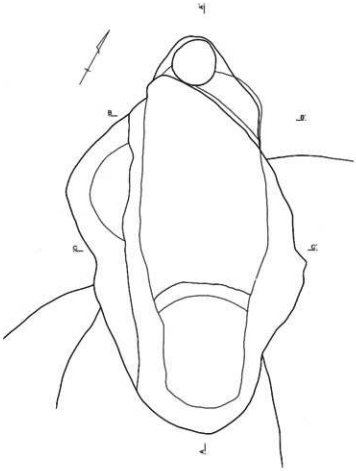
煙道部は、窯尻において77°の急勾配で立ち上がっていた。煙出しは円形で、直径0.45mを測る。この付近には天井部が残存しており、窯体の立面構造を窺うことが可能である。土層断面Ｂ－Ｂ′によると、断面形は半月形で、床面側は両端が僅かに上がるだけなのに対して、側壁から天井部は強い曲率を持つ一連のアーチ天井となっていたことがわかる。ここでは、横断面形での最大幅と最大高の計測が可能であり、前者は1.40m、後者は0.70mとなる。

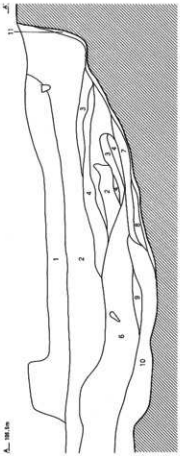
土層は、落盤した天井部が床面から0.20mほど浮いた状態で検出され、床面との間には炭化物と焼土をやや多く含む粒子の粗い褐色粘性土が堆積していた。

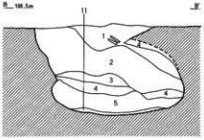
第33図　**第１号窯跡（１）**

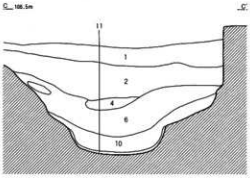


第34図　第１号窯跡（２）









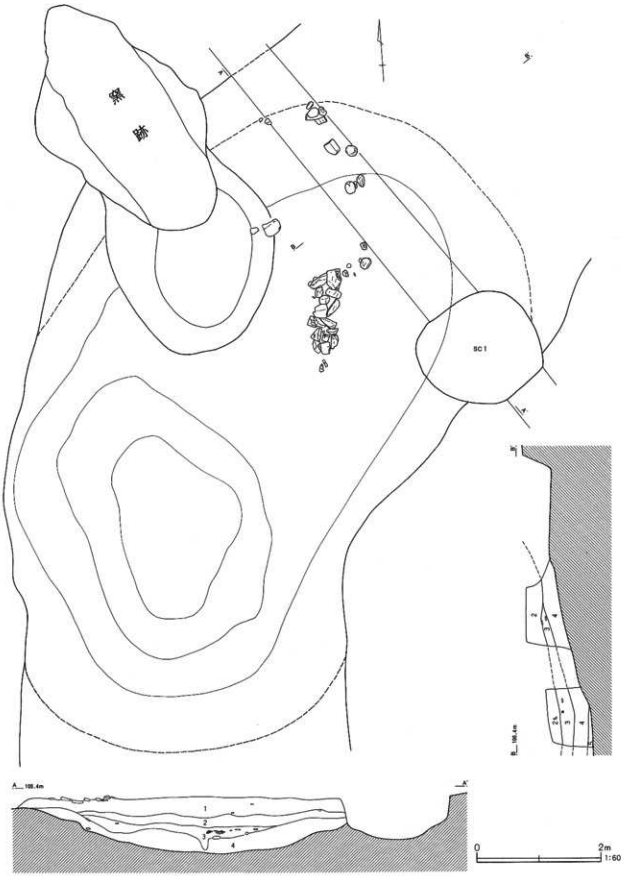
第１号窯

1　暗茶褐色粘性土　炭化物・焼土粒子多量、粘質土層。
2　暗褐色粘性土　炭化物・焼土・須恵器片多量、粘性強、粒子粗い。
3　明赤褐色粘土　４層より明るい層、粘土（被覆層）。天井部間接被熱層
4　赤　褐　色　土　窯天井部崩落層。天井部直接被熱層
5　褐色粘性土　炭化物・焼土やや多量、粘性強、粒子粗い。
6　暗　黒　色　土　炭化物・焼土多量、土器片２層より少ない。
7　灰　褐　色　被熱を受け灰色化。
8　黒　色　土　炭化物層、粘性極強。
9　淡茶褐色土　礫・焼土多量・粘土ブロック、天井部崩落層。
10　暗　黒　色　土　炭化物・焼土・崩落壁多量、粘性強、粒子粗い。
11　暗　灰　色　土　遺元層。堅く焼けしまる。

第１号窯灰層

1　黒褐色土　粒子粗く、粘性極強。（土器片含む）
2　褐　色　土　炭化物・焼土・土器片多量、粒子粗く、粘性強。
3　黒　色　土　炭化物多量、粘性極強。炭化物層。
4　暗褐色土　粘性極強。（焼鉢片含む）第１号墳覆土。
5　砂　質　土　焼土・炭化物・中礫含む、しまり欠。第１号墳覆土。

第35図　第１号窯跡灰原



煙出しから流入した土砂と天井から剥離した焼土からなる土層であろう。遺物は全く含まれていなかった。床面は被熱によって還元した暗黒色土で、硬く焼け締まっていた。その下部に地山の黄褐色土が被熱酸化した赤褐色土があるので、床面は貼床であったと考えられる。厚さは3㎝前後である。

A－A′断面によれば、当初の貼床の直上に薄い炭化物層（第8層）を挟んで灰褐色に還元し硬化した厚さ7㎝の粘土層（第7層）が延長1.70mにわたって連続している。その直上には落盤した天井部（第4層）が乗っているので、これが最終的な床面であったとみられる。この貼床は燃焼部では灰層を中心とする第10層および落盤天井を含む第9層の上に乗っているので、全体を嵩上げする形で、天井部を含めた大改修を行った可能性が高い。

灰原は前庭部の東側にあり、平面形は前庭部側が欠けた隅円方形で、幅3.30m、長さ3.67mを測る。周囲との比高差は0.45mあり、浅い皿状の窪みをなしていた。A－A′断面によれば、第1号墳の周溝底部には古墳時代から平安時代にかけて形成された埴輪片を含む厚さ0.3mの堆積層があり、その上に最大厚0.24mの炭化物層である第5層が乗っており、これが第1号窯に伴う灰原である。断面形状から見る限り、灰原は周溝の窪みを利用したものであり、周溝覆土はほとんど掘削していないのではないかと考えられる。第5層には甕などの須恵器片を相当量含むが、分布範囲は比較的狭かった。その上には炭化物、焼土、須恵器片を多量に含む褐色粘性土である第4層が乗っており、これも灰原に含めることができる。第4層の厚さは0.15m前後である。第5層に須恵器片が少なく、第4層に多いのは、操業前半期には失敗品が少なかったか、別の所に廃棄し、主に灰だけを掻き出していたが、操業後半期には失敗品を灰や焼土と共に廃棄するようになったことを反映するものかもしれない。また、後半期には窯の大改修が行われ、その際の廃棄物も多かったのではないかと推定される。

出土遺物には、大量の須恵器片と僅かの瓦片がある。須恵器の残存率はさまざまであるが、疵皿類に付いては復元実測が可能なものは全点実測し、器形が不明瞭なものだけを割愛した。いっぽう、壺・甕・鉢・瓦の類の実測は残存率の高いものに限定した。

胎土・焼成・色調は個々のデータを観察表に記した。全体を通観すると胎土に砂粒の含有が多く、細礫を交える場合も少なくない。含有鉱物は石英、雲母が共通しており、チャート、結晶片岩を含むものも認められた。焼成は不良で軟質なものが多く、色調も暗褐色ないし褐灰色を呈する割合が高く、灰色又は暗灰色のものは少数である。

須恵器高台付埦（1～45・49～51）

ロクロ水挽き成形で、内外面にロクロ目が顕著である。底部を回転糸切り離しをした後に高台を付けている。形態分類すると、口縁部が端反りし、体部の張りが強いもの（A類）と口縁部が直線的に開き、体部の張りが弱いもの（B類）とに大分類される。

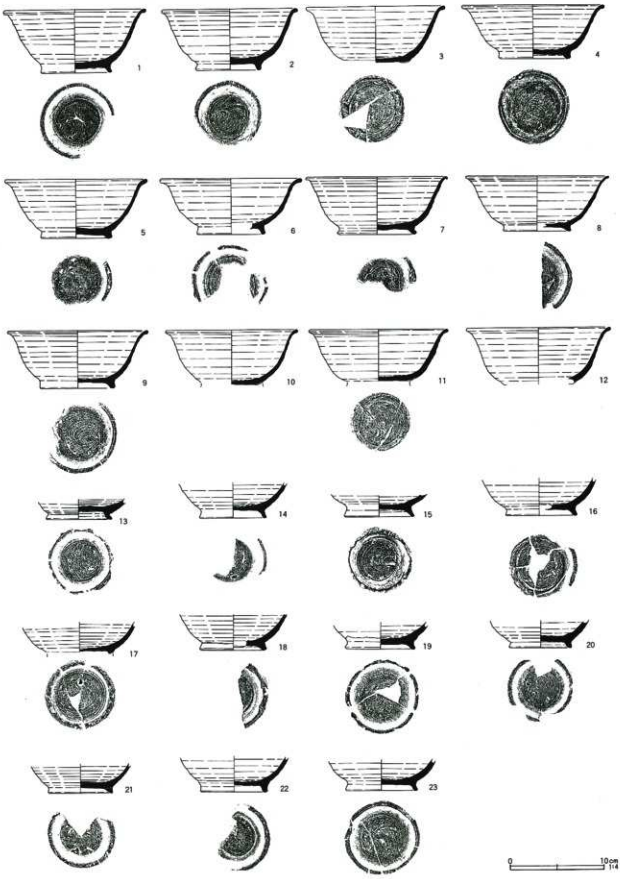
A類は高台が直立気味のもの（1類）とハの字状に大きく開くもの（2類）に細分できる。1～6はA1類に属し、口縁部が水平に開き、端部が丸く収められている。7～12はA2類に属し、高台部が大きく開くが、特に7と9は高台径そのものが大きく、10㎝を超えている。器肉はA1類よりも薄手で、口縁部の反り方がやや弱い。

B類は高台が直立気味もしくは開いていても接地が良く丸く収められているもの（1類）と高台径が1類に比べて相対的に大きく、端部が角張り、内側のみ接地するもの（2類）に細分される。36～41はB1類に属し、体部は僅かに張って斜めに立ち上がる。このうち37は特に体部が深い個体である。42～45はB2類に属し、体部の張りはほとんど認められない。底広で、体部の開き方が強く、口径が大きい。

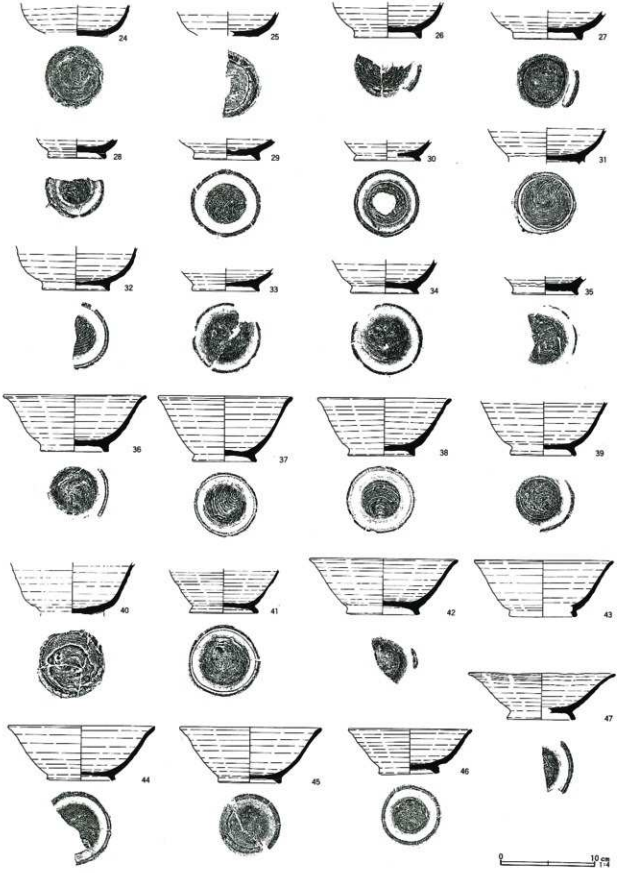
なお、高台を高く端正に作るものは少数であり、突出気味に切離した底部に低い凸帯を貼り付けて高く見せ、高台の内側を指腹で強く撫で付けるため、斜面をなすものが多い。

須恵器高台付坏（46・47・52）

第36図　第１号窯跡出土遺物（１）



第37図　第１号窯跡出土遺物（２）



第38図　第１号窯跡出土遺物（３）

体部高が口径の３分の1以下のものを坏として、椀と分離する。46は腰部が僅かに張り、口縁部が少し外反する。47は皿のように体部が斜めに開き、口縁部がさらに外反する。52は高台の剥離痕がある。体部が丸く、端反りの器形を呈する。

須恵器坏（48・53～86）

60～63は体部と口縁部が一体をなして直線的に開く器形を示すもの(B類)で、通常の深さのもの(B１類)と60のように特に深手で小底径のもの(B２類)とがある。ともに口縁部直下にヨコナデ凹線が巡る。

64～76は体部が僅かに張り、口縁部が緩やかに外反するもの(A類) で、端部の薄いもの(68・69)が少数あるが、少し肥厚させて丸く仕上げているものが多い。法量から、口径12cm以下の小型品(66)、口径14cm以上の大型品(70・71)、その中間に位置し最も個体の多い中型品がある。

48・53～55・77～82は体部が強く張り、口縁部が端反りするもの(C類)で、端部は玉縁状に肥厚させるものが多い。法量的には口径で12.2～14.8cmの変異幅があり、器高も3.4～5.0cmとばらつきが目立つ。

83～86は客体的な個体である。いずれも底広な点を特徴とするが、84はB類の亜種、83・86はA類の亜種とみることができよう。

須恵器皿（87～196）

体部に丸味をもつもの(A類)、体部に丸味をもち、口縁部が水平に開くもの(A′類)、体部から口縁部が連続して直線的に開くもの(B類)、外反して開くもの(B′類)に分かつことができる。それぞれ平底(１類)と上げ底(２類)とがある。

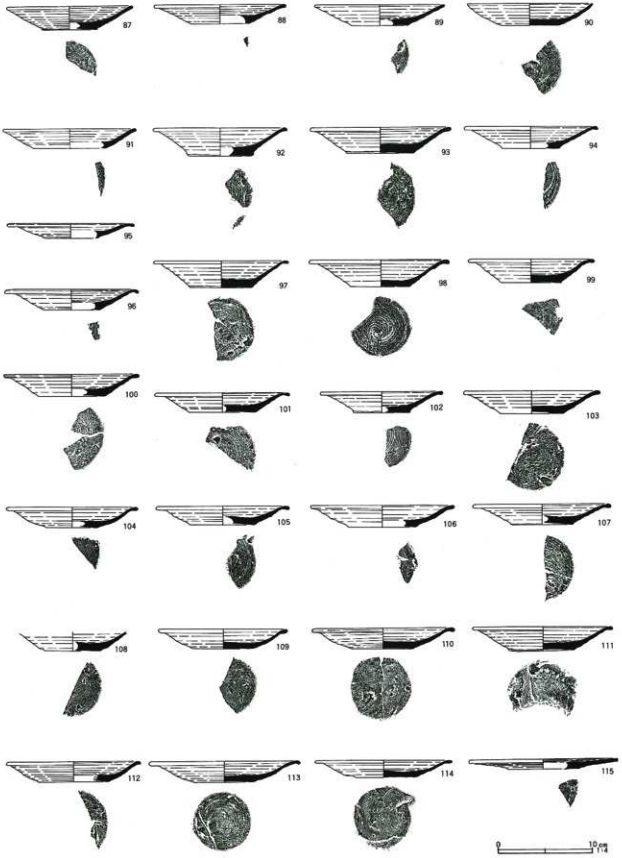
87～89・91・115・130は平底で、体部が直線的に開く個体群でB１類に属する。口縁部は肥厚せず薄く作られている。口径は14cm前後、器高は２～2.4cmの幅に収まるものが多い。115は口径が15.9cmと大型であるが、器高が僅か1.0cmと極端に浅い個体である。

92～94・97・98・102・123は平底で、体部全体が外反し、口縁端部が水平に開く個体群でB′１類に属する。口縁端部は肥厚させて丸く収める。底部は部厚く、内底面が平坦である。口径は14cm±１cmの幅に収まる。器高は2.1～3.0cmで変異幅が大きい。

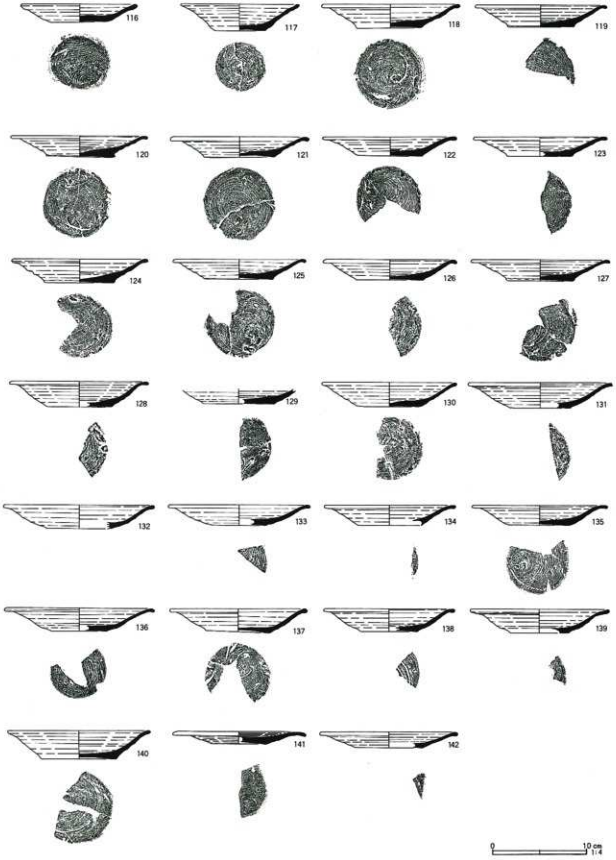
100・101・103・107・111・121・122・127・130・135・147～150・152・160・161・164・169は上げ底で、体部から口縁部が外反する個体群であり、

第39図　第１号窯跡出土遺物（４）

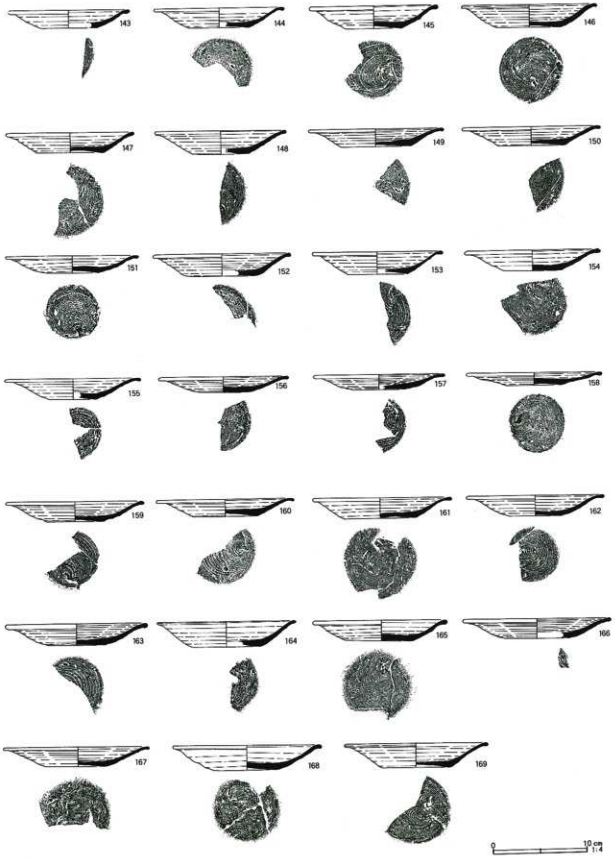
第40図　第１号窯跡出土遺物（５）



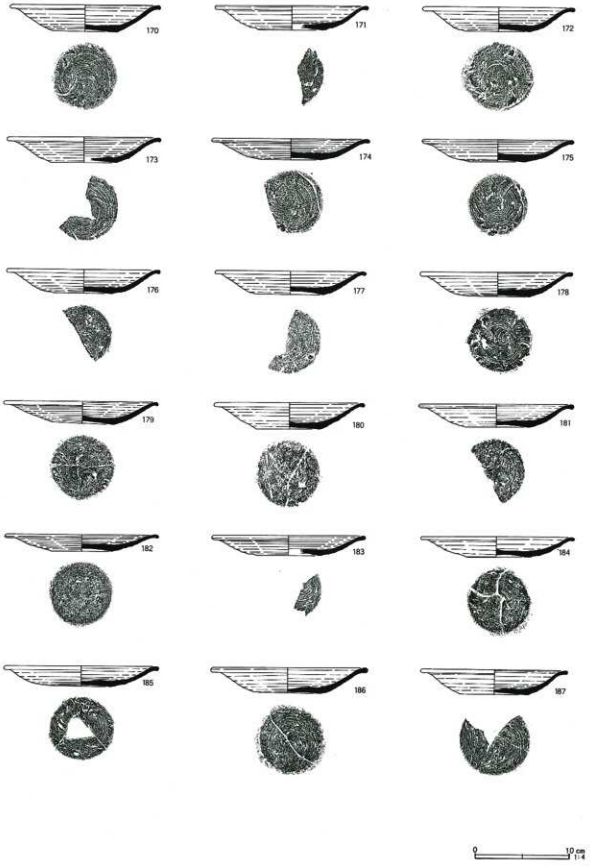
第41図　第1号窯跡出土遺物（6）



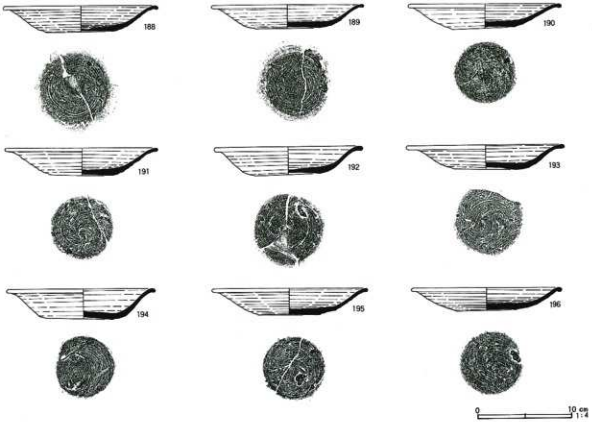
第42図　第１号窯跡出土遺物（７）



第43図　第１号窯跡出土遺物（８）



第44図　第１号窯跡出土遺物（９）



B′２類に属する。90は体部と口縁部が一体的に内湾し、平底のもの(Ａ１類)で客体的である。99・104～106・108～110・112～114・118・120・124～126・128～133・136～139・141～146・151・153～159・162・163・165は体部に丸味をもち、口縁部が水平に開くもので、上げ底(Ａ′２類)である。141と156～158は器高が極端に浅い個体であるが高温によるヘタリの可能性がある。両類とも口径は14.5cm±0.8cmの幅に収まるが、器高は1.3cm～2.7cmとばらつきが目立つ。

113・132・136・166～168・170～196は体部に丸味をもち、口縁部が外反する個体群で大型のものである。器形はすべてがＡ′２類と共通している。口径は16.2cm±0.6cm、器高は2.0～3.1cmの幅に収まり、規格性が高い。140は底広で器高の高い大型品である。口縁部の外反が緩く、直線的に開く器形を呈するので、Ｂ２類とする。法量的な作り分けと見られるので、16cm前後を大皿、14cm前後を中皿としておく。

116と117は口径が12cm前後の最小個体である。前者は僅かに外反して開き、後者は強く外反して開く。小皿に相当するが、客体的である。

須恵器壺（203）

203は広口壺の口縁部で短い頸部がくの字状に屈曲し、口縁部に縁帯が付く。

須恵器瓶（201・219・220）

201は長頸瓶の口頸部、219は体部である。220は平坦な円盤状を呈しカキメ調整されているので、提瓶の体部となろう。古墳に伴うものを焼台に転用した可能性がある。

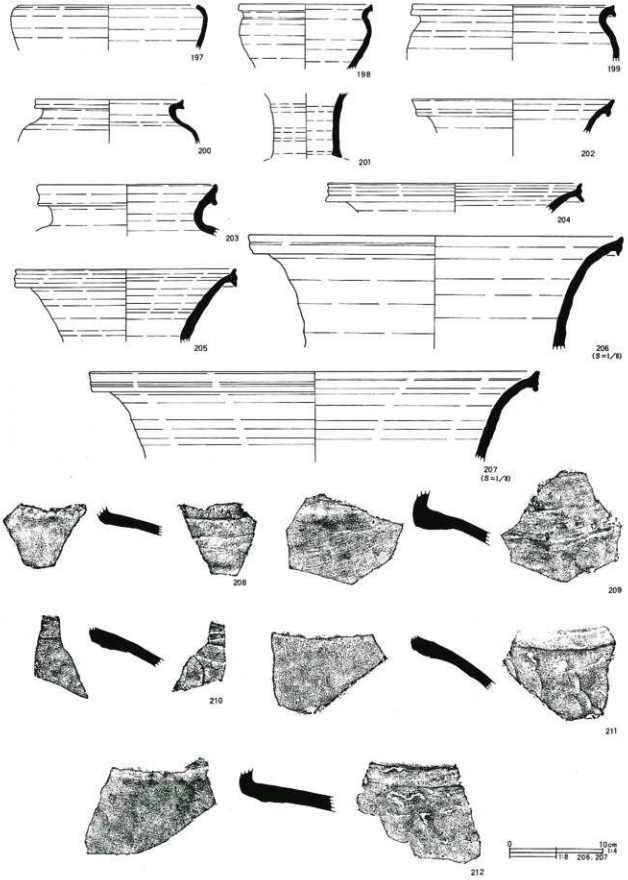
須恵器鉢（197～200）

197は鉄鉢形の口縁部である。口径は19cmある。198～200は頸部がくの字状に屈曲し短い口縁部の付く鉢で、法量に大中小がある。

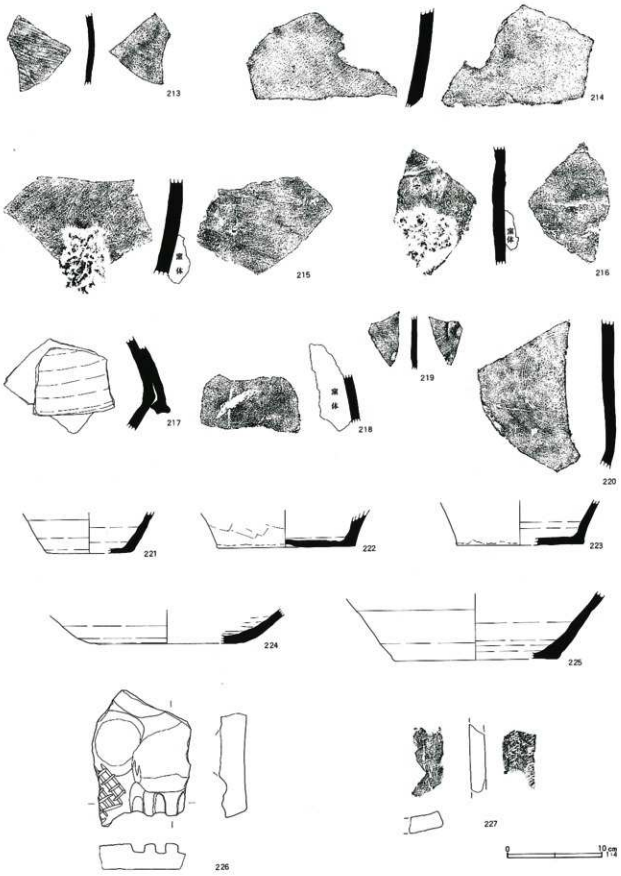
須恵器甕（202・204～218・221～225）

205は長胴の平底甕口縁部である。内面に重ね焼き痕があるので、焼台として用いられたと考えられる。端部は上下に拡張され、中間部に凸線が巡る。206と207は口縁部がラッパ状に開く大甕の口縁部である。

第45図　第１号窯跡出土遺物（10）



第46図　第１号窯跡出土遺物（11）



第１号窯跡出土遺物観察表（第36～46図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付皿	15.2	6.7	7.6	ABDE	Ⅲ	褐灰色	55	土器集中No.7
2	高台付皿	14.5	6.5	7.0	ABCEG	Ⅲ	褐灰色	35	
3	高台付皿	14.8	(6.0)	－	ABEGIJ	Ⅲ	褐灰色	60	
4	高台付皿	15.2	5.7	7.6	ABCEI	Ⅲ	黄灰色	70	
5	高台付皿	(15.2)	6.2	(7.6)	ABDE	Ⅲ	黄灰色	35	
6	高台付皿	(15.1)	5.9	(7.3)	ABDEI	Ⅲ	褐灰色	30	
7	高台付皿	15.0	6.1	8.4	ABCE	Ⅲ	赤褐色	50	
8	高台付皿	(15.2)	5.8	(7.1)	ABEGH	Ⅲ	黄灰色	30	
9	高台付皿	15.0	6.1	8.0	ABEG	Ⅲ	褐灰色	70	
10	高台付皿	14.2	(5.8)	－	ABEHI	Ⅲ	黄灰色	25	
11	高台付皿	14.8	(4.9)	－	ABCEG	Ⅲ	褐灰色	50	
12	高台付皿	(15.3)	(6.0)	－	ABEG	Ⅲ	褐灰色	10	
13	高台付皿	－	(2.2)	7.0	BCEI	Ⅰ	青灰色	80	
14	高台付皿	－	(3.7)	7.1	ABEGH	Ⅲ	黄灰色	30	
15	高台付皿	－	(2.4)	7.5	ABEG	Ⅲ	褐灰色	20	
16	高台付皿	－	(4.0)	7.6	ABEIJ	Ⅲ	褐灰色	70	
17	高台付皿	－	(3.4)	－	ABCE	Ⅲ	褐灰色	45	
18	高台付皿	－	(3.8)	(7.0)	ADEH	Ⅲ	黄灰色	25	
19	高台付皿	－	(2.9)	7.5	ABEG	Ⅲ	褐灰色	80	
20	高台付皿	－	(2.9)	6.6	BCEI	Ⅰ	灰褐色	75	
21	高台付皿	－	(3.1)	6.8	BCEI	Ⅰ	暗灰色	70	
22	高台付皿	－	(3.8)	(7.2)	ABEGH	Ⅲ	黄灰色	20	
23	高台付皿	－	(3.3)	7.6	BCEG	Ⅲ	黄灰色	65	
24	高台付皿	－	(3.5)	－	ACEG	Ⅲ	褐灰色	40	
25	高台付皿	－	(2.6)	－	ABDE	Ⅲ	褐灰色	25	
26	高台付皿	－	(3.8)	7.2	ABEG	Ⅲ	褐灰色	40	
27	高台付皿	－	(3.0)	7.4	ABEG	Ⅲ	褐灰色	30	
28	高台付皿	－	(2.1)	6.2	BCEHI	Ⅲ	黄灰色	20	
29	高台付皿	－	(2.3)	(7.2)	AEGIJ	Ⅲ	褐灰色	15	
30	高台付皿	－	(2.2)	7.1	ABEJ	Ⅲ	黄灰色	30	
31	高台付皿	－	(3.8)	－	ABCEG	Ⅲ	褐灰色	30	
32	高台付皿	－	(4.6)	7.2	BCEHI	Ⅱ	灰褐色	40	
33	高台付皿	－	(2.4)	7.3	ABE	Ⅲ	褐灰色	60	
34	高台付皿	－	(3.6)	(7.3)	ABCEH	Ⅲ	黄灰色	40	
35	高台付皿	－	(2.0)	7.0	ABDEG	Ⅲ	灰褐色	60	
36	高台付皿	15.3	6.0	7.3	BEHIJ	Ⅲ	黄灰色	75	
37	高台付皿	14.3	6.9	6.8	ABEG	Ⅲ	赤褐色	60	
38	高台付皿	14.2	6.1	7.1	BEHI	Ⅱ	淡灰色	50	
39	高台付皿	－	(5.7)	(7.0)	ABCEG	Ⅲ	黄灰色	45	
40	高台付皿	－	5.4	－	ABCEI	Ⅲ	褐灰色	65	
41	高台付皿	－	(4.7)	(7.3)	BEIJ	Ⅰ	青灰色	40	
42	高台付皿	(15.8)	5.9	(7.8)	ABCJ	Ⅲ	黄灰色	30	
43	高台付皿	(14.8)	6.0	(7.3)	BEGI	Ⅱ	灰褐色	10	
44	高台付皿	15.8	5.8	7.3	ACEHI	Ⅲ	褐灰色	55	
45	高台付皿	15.2	5.9	6.8	ABEHI	Ⅲ	褐灰色	55	
46	高台付坏	13.1	4.9	6.5	BCEGJ	Ⅰ	灰色	95	
47	高台付坏	(15.7)	5.0	(7.3)	BCEI	Ⅰ	青灰色	25	
48	坏	(12.2)	4.3	(6.0)	BCEGI	Ⅰ	青灰色	10	
49	高台付皿	(14.5)	(5.3)	－	ABEG	Ⅲ	褐灰色	40	
50	高台付皿	(15.0)	5.5	(7.2)	BDGI	Ⅲ	褐灰色	45	
51	高台付皿	(15.2)	5.4	(6.8)	ABCEI	Ⅲ	褐灰色	20	
52	高台付坏	13.2	4.1	4.8	BGHIM	Ⅱ	黄橙色	25	
53	坏	14.2	4.3	(6.6)	ABEGI	Ⅱ	灰褐色	20	
54	坏	(15.5)	5.0	(7.0)	ABEGH	Ⅲ	褐灰色	10	
55	坏	14.2	(4.5)	－	AEGIJ	Ⅲ	褐灰色	35	
56	坏	－	(2.8)	5.6	BEHI	Ⅱ	灰褐色	30	
57	坏	－	(3.5)	5.7	ABEHI	Ⅲ	赤褐色	30	
58	坏	－	(3.9)	(7.2)	ABDE	Ⅲ	褐灰色	30	
59	坏	－	(1.9)	(6.0)	BEGH	Ⅲ	灰褐色	20	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
60	坏	11.9	4.2	5.0	BEIJ	I	青灰色	90	
61	坏	12.2	3.8	5.5	BEI	I	青灰色	75	
62	坏	(12.8)	3.7	5.6	BDEI	II	灰褐色	25	
63	坏	(12.6)	4.2	(6.0)	ACE	III	褐灰色	20	
64	坏	(13.0)	3.7	(6.0)	BEGHI	II	淡灰色	20	
65	坏	(12.8)	3.5	(5.0)	BEJ	II	青灰色	25	
66	坏	(12.0)	3.0	(5.6)	BEHI	I	灰褐色	10	
67	坏	(12.5)	3.4	(6.2)	BEGI	I	灰色	15	
68	坏	(12.5)	3.4	(5.3)	BEGH	II	淡灰色	25	
69	坏	13.0	3.2	(5.6)	CEHI	I	青灰色	25	
70	坏	(14.5)	3.8	(7.0)	ABEG	III	褐灰色	30	
71	坏	(14.0)	3.9	(6.5)	ABEH	III	黄灰色	30	
72	坏	(12.6)	3.6	(6.0)	BCEI	II	灰褐色	10	
73	坏	13.7	3.8	6.0	ABEIJ	III	褐灰色	70	
74	坏	(12.8)	3.4	(5.2)	BEHI	II	淡灰色	40	
75	坏	13.2	3.7	5.0	BCEHI	I	暗灰色	30	
76	坏	(12.5)	3.5	(6.0)	BEGI	I	灰色	10	
77	坏	13.3	3.4	5.6	BEGI	II	灰褐色	30	
78	坏	14.5	4.3	6.4	ABCEG	III	赤褐色	50	
79	坏	(13.4)	3.5	(6.0)	BEGH	III	黄灰色	25	
80	坏	14.3	4.1	7.0	BCEGI	I	灰褐色	85	
81	坏	(14.8)	4.0	(6.8)	ABEGH	II	黄灰色	15	
82	坏	14.0	4.0	(6.0)	BEI	III	褐灰色	20	
83	坏	13.7	3.2	7.2	BEIJ	I	青灰色	80	
84	坏	(12.0)	4.2	(5.8)	BCEHI	II	灰褐色	10	
85	坏	(14.4)	2.6	(6.7)	BEIJ	III	褐灰色	10	
86	坏	12.2	3.0	6.0	ABE	III	暗灰色	10	
87	皿	(13.5)	2.5	(6.0)	BCEI	II	灰褐色	20	
88	皿	(14.1)	2.0	(6.2)	BEJ	III	暗灰色	10	
89	皿	(13.9)	2.2	(6.1)	BEHI	I	青灰色	10	
90	皿	13.4	2.3	6.0	BHIJ	III	黄灰色	20	
91	皿	(14.2)	2.1	(7.6)	BEH	II	淡灰色	10	
92	皿	14.3	3.0	7.2	BCEI	III	暗灰色	45	
93	皿	(15.0)	2.8	7.3	ABCEI	III	暗灰色	25	
94	皿	(14.2)	2.3	(6.2)	ABEI	III	灰褐色	15	
95	皿	(13.6)	2.1	(6.0)	ABE	III	灰褐色	15	
96	皿	(14.3)	2.2	(6.0)	ABEI	III	褐灰色	20	
97	皿	14.4	2.8	6.9	BEGHJ	III	灰褐色	40	
98	皿	14.9	2.9	6.4	ABEGHI	III	灰褐色	65	
99	皿	(13.4)	2.5	6.4	ABEGI	III	暗灰色	20	
100	皿	(14.4)	2.3	(7.0)	ABDEI	III	灰褐色	45	
101	皿	(14.4)	2.0	(7.0)	ABEGJ	III	灰褐色	20	
102	皿	(13.0)	2.2	(6.0)	BCEGH	III	暗灰色	20	
103	皿	14.6	2.4	6.8	BEHIJ	III	暗褐色	50	
104	皿	(14.0)	2.2	(5.6)	BCEGJ	III	灰褐色	15	
105	皿	(14.1)	2.0	(7.0)	ABEGI	III	暗灰色	15	
106	皿	15.2	2.3	7.3	ABEI	III	暗灰色	40	
107	皿	(14.7)	2.2	(6.7)	ABEIJ	III	灰褐色	50	
108	皿	—	(2.0)	(6.0)	BEGHJ	III	黄褐色	20	
109	皿	13.7	2.1	6.2	BEGHI	III	灰褐色	45	
110	皿	15.0	2.2	6.4	ABEIJ	III	暗灰色	70	
111	皿	14.9	2.5	6.9	BCEIJ	III	暗灰色	80	
112	皿	(14.3)	2.1	(7.4)	BEHI	II	灰褐色	25	
113	皿	16.0	2.2	6.2	ABEGI	III	褐灰色	75	
114	皿	14.6	1.8	6.1	BEIJ	II	淡灰色	60	
115	皿	(15.9)	1.0	(7.6)	BCEI	I	青灰色	10	
116	皿	12.0	2.0	5.8	BEI	I	青灰色	80	
117	皿	12.6	2.8	5.4	BCEI	I	青灰色	100	
118	皿	14.7	2.5	7.0	BEGI	III	暗灰色	95	

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
119	皿	14.0	2.3	7.2	ABEGI	Ⅲ	灰褐色	25	
120	皿	14.5	2.2	7.3	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	75	
121	皿	14.7	2.2	7.5	BEGIJ	Ⅲ	暗灰色	70	
122	皿	14.3	2.0	7.0	ABEGJ	Ⅲ	灰褐色	50	
123	皿	(14.3)	2.0	(7.0)	ABEI	Ⅲ	褐灰色	20	
124	皿	14.4	2.6	7.5	ABCEGI	Ⅲ	灰褐色	20	
125	皿	14.1	2.1	7.3	ABEGI	Ⅲ	灰褐色	85	
126	皿	14.3	2.1	7.2	ABEIJ	Ⅲ	灰褐色	45	
127	皿	14.3	2.3	7.3	ABEI	Ⅲ	暗灰色	20	
128	皿	14.8	2.7	7.0	ABEI	Ⅲ	灰褐色	20	
129	皿	－	(1.6)	(7.6)	ABEIJ	Ⅲ	灰褐色	15	
130	皿	14.2	2.6	6.9	ABEI	Ⅲ	灰褐色	25	
131	皿	(15.4)	2.7	(6.5)	BDEI	Ⅱ	灰褐色	35	
132	皿	16.0	2.5	(7.0)	ABEI	Ⅱ	灰褐色	10	
133	皿	15.2	2.2	(5.8)	ABEG	Ⅲ	灰褐色	10	
134	皿	14.0	2.1	(6.6)	AEGI	Ⅲ	灰褐色	10	
135	皿	14.5	2.1	6.4	ABCEI	Ⅲ	暗灰色	50	
136	皿	(16.0)	2.4	(6.0)	ABEIJ	Ⅲ	褐灰色	40	
137	皿	14.6	2.4	6.8	ABDEI	Ⅲ	灰褐色	60	
138	皿	(13.9)	2.4	(6.0)	BEI	Ⅲ	暗灰色	20	
139	皿	(14.9)	2.5	(6.3)	BDEGHI	Ⅱ	黄灰色	20	
140	皿	(15.2)	3.0	8.0	BEGI	Ⅲ	暗灰色	40	
141	皿	(14.2)	1.3	(5.8)	BEHI	Ⅰ	暗灰色	20	
142	皿	(14.7)	1.7	(7.3)	ABEI	Ⅲ	灰褐色	5	
143	皿	(13.0)	1.9	(6.0)	BEHI	Ⅲ	黄灰色	10	
144	皿	(13.9)	2.1	(6.3)	BCGJ	Ⅱ	灰褐色	40	
145	皿	13.7	2.4	6.0	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	55	
146	皿	14.4	2.4	6.7	BCEI	Ⅰ	灰　色	50	
147	皿	13.7	2.1	7.2	ABCEGI	Ⅲ	暗灰色	45	
148	皿	(14.0)	2.5	(6.2)	BEHI	Ⅲ	灰褐色	30	
149	皿	14.4	1.9	7.4	CEGI	Ⅲ	黄灰色	10	
150	皿	14.7	2.0	7.0	BEHI	Ⅲ	暗灰色	25	
151	皿	14.2	1.8	5.6	BEHJ	Ⅱ	暗灰色	25	
152	皿	(14.2)	2.4	(7.4)	ABEGI	Ⅲ	暗灰色	40	
153	皿	13.8	2.4	6.4	BEGIJ	Ⅱ	暗灰色	45	
154	皿	14.5	2.2	6.3	BEGHI	Ⅱ	黄灰色	30	
155	皿	(14.5)	2.2	(5.2)	ABCEI	Ⅲ	褐灰色	40	
156	皿	13.8	1.6	6.2	BEGIJ	Ⅰ	灰　色	20	
157	皿	(14.0)	1.6	(5.6)	BCEI	Ⅱ	暗灰色	25	
158	皿	14.5	1.3	5.8	BEGI	Ⅰ	灰　色	30	
159	皿	14.8	2.1	6.3	ABEI	Ⅱ	黄灰色	50	
160	皿	14.7	1.8	6.8	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	40	
161	皿	14.9	2.2	7.5	BEGI	Ⅲ	灰褐色	50	
162	皿	14.7	2.1	5.6	ABEGIJ	Ⅲ	褐灰色	50	
163	皿	15.1	2.3	6.3	BEGI	Ⅱ	暗灰色	40	
164	皿	(14.8)	2.6	(7.0)	ABEG	Ⅲ	褐灰色	25	
165	皿	14.2	2.2	7.4	BCEGI	Ⅲ	黄灰色	75	
166	皿	(15.8)	2.1	(6.8)	BCEI	Ⅱ	青灰色	10	
167	皿	15.5	2.0	6.6	BCEI	Ⅰ	青灰色	45	
168	皿	15.8	2.7	6.6	ABCEHI	Ⅲ	黄灰色	75	
169	皿	15.3	2.6	7.2	ABEGI	Ⅲ	灰褐色	45	No.1
170	皿	16.0	2.8	6.8	ABEGIJ	Ⅲ	褐灰色	50	
171	皿	(16.3)	2.6	(7.4)	ABEGI	Ⅲ	灰褐色	30	
172	皿	16.2	2.5	7.0	BEGHIJ	Ⅲ	灰褐色	40	
173	皿	(16.3)	2.7	(7.0)	ABDEGI	Ⅲ	灰褐色	35	
174	皿	16.8	2.2	6.4	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	50	
175	皿	16.2	2.3	6.0	ABEGI	Ⅲ	灰褐色	40	
176	皿	16.3	2.5	6.4	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	45	
177	皿	16.0	2.5	7.0	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	40	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
178	皿	16.3	2.6	6.6	ABDEIJ	III	褐灰色	90	
179	皿	16.4	2.4	6.6	BEIJ	II	淡灰色	45	
180	皿	16.0	2.8	6.8	ABEGI	III	灰褐色	45	
181	皿	16.5	2.4	6.9	ABEGI	III	灰褐色	50	
182	皿	16.3	2.8	6.4	ABEGI	III	黄灰色	45	
183	皿	(16.3)	2.1	(7.0)	ABEGI	III	褐灰色	20	
184	皿	16.4	2.2	6.9	ABEGI	III	黄灰色	80	
185	皿	16.5	2.1	7.0	ABEI	III	灰褐色	75	
186	皿	16.7	2.7	6.6	ABEGHI	III	褐灰色	90	
187	皿	15.7	2.6	7.3	ABCEGI	III	褐灰色	60	
188	皿	16.4	2.9	7.0	ABEI	III	褐灰色	75	
189	皿	16.2	2.5	6.6	ABEIJ	III	灰褐色	65	
190	皿	16.2	2.7	6.6	BCEGHIJ	III	黄灰色	90	
191	皿	16.3	3.0	6.8	AEGI	III	褐灰色	80	
192	皿	15.8	3.1	7.1	ABEGIJ	III	黄灰色	80	
193	皿	16.8	2.6	6.8	ABEGHI	III	褐灰色	50	
194	皿	15.9	3.1	7.2	ABDEI	III	褐灰色	70	
195	皿	16.6	2.8	6.6	ABCEIJ	III	褐灰色	75	
196	皿	16.0	2.5	6.4	BCEHIJ	III	黄灰色	95	
197	鉢形	(19.0)	(4.7)	−	BCEI	I	灰色	10	
198	鉢	(14.0)	(6.8)	−	BCEGI	I	青灰色	25	
199	鉢	(21.5)	(5.9)	−	BCEGI	I	灰色	20	
200	鉢	(15.7)	(4.5)	−	BEI	I	暗灰色	35	
201	長頸瓶	−	(6.9)	−	BCEGHI	I	灰色	35	
202	甕	(21.4)	(3.1)	−	BEGI	I	暗灰色	5	
203	広口壺	(18.4)	(5.4)	−	BEGI	I	灰色	10	
204	甕	(27.4)	(3.1)	−	BEI	I	暗灰色	5	
205	甕	(23.6)	(7.8)	−	BCEI	I	灰色	10	内面重ね焼き痕
206	甕	40.0	(11.9)	−	BEHI	II	淡灰褐色	80	
207	甕	(48.0)	(9.6)	−	BCEGI	I	暗灰色	15	
208	甕	−	(5.4)	−	ABCE	II	淡灰色	−	
209	甕	−	(5.7)	−	BCEI	I	暗灰色	−	
210	甕	−	(3.5)	−	BEI	II	淡灰色	−	
211	甕	−	(5.0)	−	BDEI	III	灰褐色	−	
212	甕	−	(5.0)	−	BEGHI	I	暗灰色	−	
213	甕	−	(7.5)	−	BEI	II	淡灰色	−	
214	甕	−	(11.5)	−	BCEI	I	暗灰色	−	
215	甕	−	(10.3)	−	BEIJ	I	暗灰色	−	
216	甕	−	(12.5)	−	BEHI	II	暗灰色	−	
217	甕	−	(10.0)	−	BCHI	I	暗灰色	−	
218	甕	−	(9.2)	−	CEI	I	灰色	−	
219	長頸瓶	−	(5.6)	−	BEI	I	灰色	−	
220	提瓶	−	(15.7)	−	BCE	III	黄灰色	−	
221	甕	−	(4.3)	(9.0)	BCEHI	I	青灰色	35	
222	甕	−	(3.7)	14.6	BCEI	I	暗灰色	45	
223	甕	−	(4.7)	(13.4)	BCHI	I	青灰色	20	
224	甕	−	(3.6)	(16.5)	BCEGI	I	灰色	25	
225	甕	−	(7.0)	(17.2)	BEGIJ	I	灰色	10	
226	鬼瓦	長(14.5)	幅(10.5)	厚 2.7	BEGI	I	暗灰色	−	
227	平瓦	−	−	−	ABCJ	III	褐灰色	−	

端部は上下に拡張される。208～218は肩部及び体部の破片である。このうち212の頸部には波状文が施されている。215・216・218には窯壁が付着する。217は底部と口縁部の溶着資料であり、焼台である。221～223は205のような口縁部をもつ平底長胴甕の底部、224と225は倒卵形の体部をもつ大甕の底部となろう。

瓦（226・227）

226は鬼瓦である。大きな鼻と丸い目の剝離痕があり、鼻の下には牙状の歯の表現がある。頬の部分には

ヘラ描きの斜格子文がある。227は平瓦で、凹面に布目、凸面には叩き目がある。

(3) 土 壙

第1号集積土壙 (第47図)

本土壙はD－5グリッドに位置し、2区中央部に存在する。第1号墳の周溝内側立上り部に掘り込まれており、第35図A－A′土層によれば、第1号窯の灰原に堆積した土層を切っており、第1号窯より新しい。

平面形は楕円形を呈し、規模は東西2.00m、南北1.78mで、深さは0.73mある。断面形は逆台形である。

プラン確認の段階で、土壙内に大量の礫が含まれていることが確認された。荒川の川原石であり、亜角礫が多かった。大きさは拳大から人頭大が大多数を占め、最大のものは長さ40cmほどあった。

5面に分けて検出作業を行った結果、第2面から第4面では礫と共に多数の須恵器瓶・坏類が出土し、第5面からは須恵器のみが出土した。これらの多くは赤焼の須恵器であり、完形品の割合が高かったが、焼け歪み品や焼成不良品と見なすことができた。したがって、第1号窯以降に築かれた別の窯の失敗品を廃棄した土壙と考えられる。礫は生産活動において邪魔になるものをまとめて処分したものと思われる。第1号墳を蔽っていた葺石の可能性が高く、墳丘の破壊が進んでいたことが推測される。

出土遺物は須恵器坏を主体とし、他に高台付瓶・鉢・壺がある。

須恵器坏 (1～27)

すべて体部が僅かに張り、口縁部が緩やかに外反するもので、第1号窯跡出土遺物と対比して分類すると、A類に属する。口径は12.0～13.2cmの幅に収まるものが多い。18を除くすべてが酸化焔焼成であり、橙色ないし黄橙色を呈する。全体的に薄手で脆弱であり、器表に気泡膨れのあばたが目立つ。また、ロクロ目が強く調整は雑である。

17～21は体部の張りがやや強い。22～27は底広で、口縁端部が玉縁状に肥厚する。22は口径が14.1cmあり、他より大きい。24～27はやや低器高のものである。底部はいずれも回転糸切り離しが行われている。

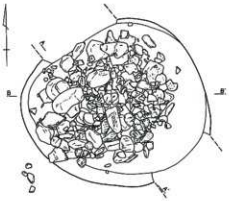
須恵器高台付瓶 (28～34)

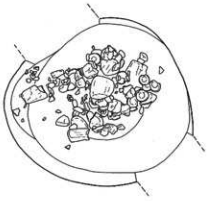
体部の張りが弱く、口縁端部が僅かに外反する。高台は低く、内側が強く撫で付けられている。法量に大中小がある。28～30は口径16cm前後の中型瓶、31と34は大型瓶で口径はそれぞれ、18cmと17cmある。32と33は小型瓶で、後者の口径は13cm強である。32・33のみが還元焔焼成で、他は酸化焔焼成である。調整は粗雑で、器表の気泡ふくれが目立つ。

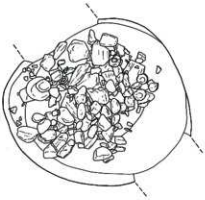
第1号集積土壙出土遺物観察表 (第48～49図)

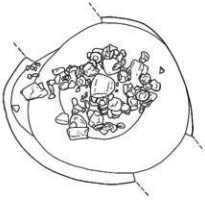
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.7	3.8	6.0	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	80	№108
2	坏	12.5	3.7	(6.7)	ABEHI	Ⅲ	褐灰色	80	№132・133
3	坏	12.4	3.9	6.0	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	95	№ 68
4	坏	12.5	3.8	5.5	ABEIJ	Ⅲ	褐灰色	95	№115
5	坏	12.6	3.6	6.4	ABEI	Ⅲ	褐灰色	90	№101・102
6	坏	12.0	3.8	5.5	ABEHI	Ⅲ	褐灰色	90	№ 94
7	坏	12.2	3.5	5.6	ABEIJ	Ⅲ	褐灰色	90	№110・111
8	坏	－	(2.6)	(5.4)	BEIJ	Ⅰ	灰色	30	№149
9	坏	12.5	3.7	5.8	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	95	№ 72
10	坏	12.7	4.0	6.1	ABEIJ	Ⅲ	褐灰色	90	№ 91
11	坏	13.1	3.7	5.7	ABEI	Ⅲ	褐灰色	80	№100
12	坏	13.0	3.7	5.6	ABEHI	Ⅲ	褐灰色	80	№ 95
13	坏	13.0	3.8	6.0	ABEHI	Ⅲ	褐灰色	70	№ 42
14	坏	13.2	3.7	5.9	ABEI	Ⅲ	黄灰色	75	№ 74・75
15	坏	12.7	3.8	5.8	ABEJ	Ⅲ	褐灰色	50	№ 73
16	坏	12.9	(2.9)	－	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	70	№106
17	坏	13.0	3.6	5.8	AEI	Ⅲ	褐灰色	65	№ 69
18	坏	12.9	3.8	5.5	BEIJ	Ⅰ	青灰色	85	№ 71

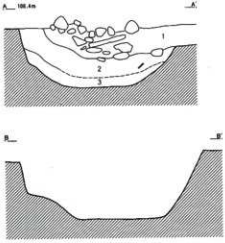
第47図　第１号集積土壙

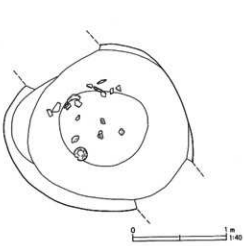








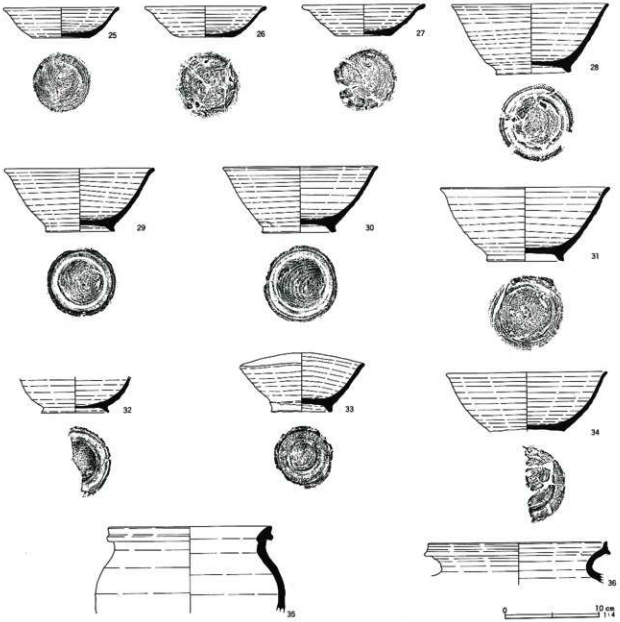




第１号集積
1　黒褐色土　粘性極強、粒子粗い。（平安後期土器片含む）
2　褐 色 土　粘性強、ローム混入。
3　明褐色土　地山ローム土ブロックを含む。

第48図　第１号集積土壙出土遺物（１）

第49図　第1号集積土壙出土遺物（2）



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
19	坏	12.5	3.7	5.8	ABEHI	Ⅲ	褐灰色	95	No. 70
20	坏	12.9	3.6	5.8	ABEI	Ⅲ	褐灰色	75	No.107
21	坏	12.6	3.7	5.5	ABEI	Ⅲ	褐灰色	70	No.109
22	坏	14.1	3.7	6.3	ABE	Ⅲ	褐灰色	60	No. 76
23	坏	13.2	3.7	6.3	ABE	Ⅲ	褐灰色	90	No.136
24	坏	13.1	3.2	6.0	BEIJ	Ⅲ	黄灰色	55	No.137
25	坏	12.2	3.2	5.9	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	60	No.104
26	坏	13.0	3.2	5.8	ABEI	Ⅲ	褐灰色	80	No. 90
27	坏	13.1	3.3	6.0	ABEI	Ⅲ	褐灰色	55	No.135
28	高台付皿	16.6	7.4	8.0	ABEG	Ⅲ	褐灰色	75	No.105
29	高台付皿	15.9	6.6	7.3	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	90	No. 97・98
30	高台付皿	16.4	7.0	7.9	ABEI	Ⅲ	褐灰色	90	No. 98・101・119
31	高台付皿	18.0	7.8	8.2	ABEI	Ⅲ	褐灰色	75	No. 96
32	高台付皿	－	(3.7)	7.1	BEHI	Ⅰ	暗褐色	50	No. 24
33	高台付皿	13.2	6.2	6.6	BEHI	Ⅱ	灰褐色	95	No. 36
34	高台付皿	(17.1)	(6.2)	－	ABEGI	Ⅲ	褐灰色	30	No. 93
35	鉢	17.4	(9.2)	－	BEHI	Ⅰ	暗灰色	50	No.140
36	広口壺	(19.0)	(4.4)	－	BEGI	Ⅰ	灰色	10	No. 52

須恵器鉢（35）

35は撫肩の鉢で、口縁部には厚みのある縁帯が付き、側面は凹面をなす。

須恵器壺（36）

36は頸部の短い広口壺で、口縁端部は上下に拡張され、凹面をなす。

第２号集積土壙（第19図）

Ｃ－３グリッドに位置し、２区北部に存在する。第２号墳の周溝内に掘り込まれ、ほとんど周溝と重複するが、北側部分は、わずかに周溝外側に突出している。平面形は楕円形で、推定規模は東西7.2m、南北6.0mを測り、深さは0.96mある。断面形はＵ字形で、コンターが同心円状に廻っている。

覆土上層は礫を多量に、焼土と炭化物を微量含む黒色土、下層は礫と平安時代の須恵器片を多量に、炭化物と焼土を微量含む黒色土であった。

プラン確認の際には別遺構とは認識できなかったが、土層断面によって平安時代の土壙であることが確認されたので、第２号集積土壙とした。規模的には第1号集積土壙よりも規模が大きいが、多量の須恵器が礫と共に廃棄されていることは共通しており、付近に所在する未調査の須恵器窯で焼かれ、失敗したものを廃棄した土壙であった可能性が考えられる。

出土遺物は須恵器坏・皿・高台付瓶を主体とし、他に高台付坏・鉢・壺・瓦などがある。

須恵器坏（１～４）

１は体部が口縁部と一体的となって直線的に開く器形を示し、第１号窯跡出土資料との対比から、Ｂ１類に属す。やや浅手である。２はＢ類に準じるが、体部が少し張るもので、口縁端部が少し肥厚する。新たにＤ類とする。

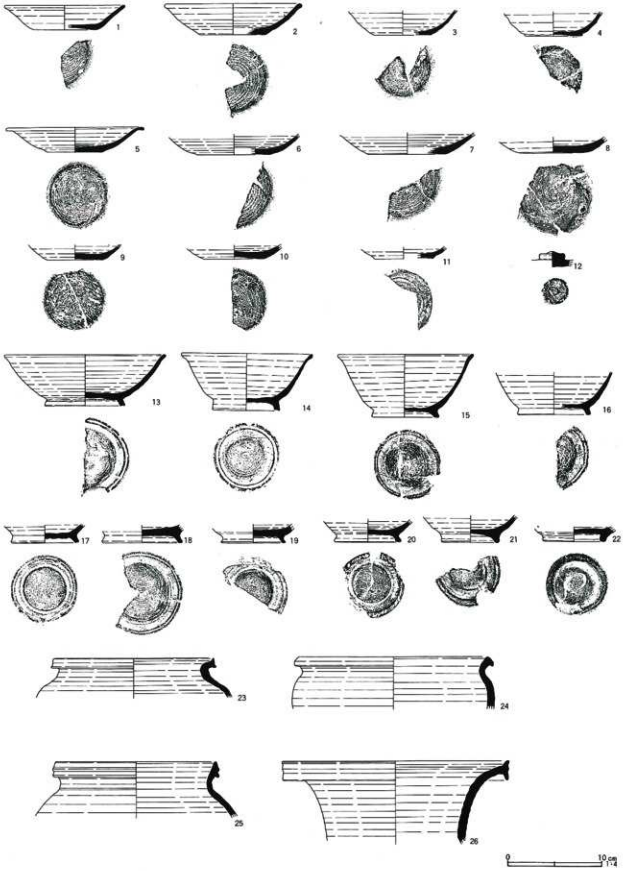
須恵器皿（５～11）

５は平底で、体部に丸味があり、口縁部が屈曲して水平に開くもので、Ａ１類に属する。器高がやや高く、体部の張りが強い。口径は14.8cmで、中型皿である。法量にバラエティーがあり、６と７は口径16cm前後と推定できるので大型皿になろう。

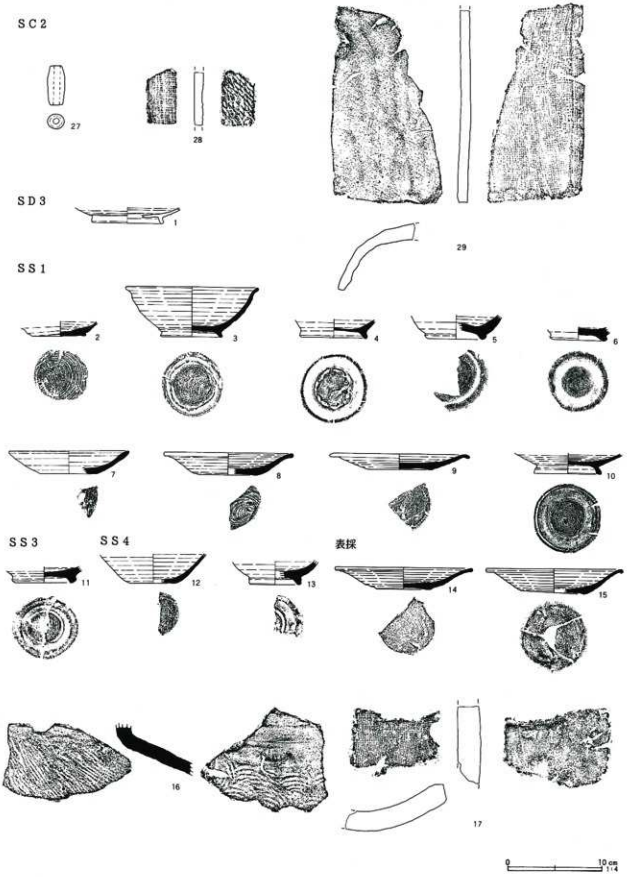
第２号集積土壙出土遺物観察表（第50～51図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	坏	(12.8)	2.6	(6.9)	BEGH	Ⅲ	褐灰色	25	SS2
2	坏	(14.6)	3.3	(7.0)	BEIJ	Ⅰ	青灰色	40	SS2
3	坏	－	(2.6)	(6.0)	ABEI	Ⅲ	赤褐色	20	SS2
4	坏	－	(2.6)	(6.2)	BEHI	Ⅲ	淡灰色	20	SS2
5	皿	14.4	2.6	5.9	BEIM	Ⅱ	灰褐色	75	SS2
6	皿	－	(2.2)	(8.0)	ABDEI	Ⅲ	褐灰色	20	SS2
7	皿	－	(2.3)	(8.8)	BEI	Ⅲ	淡灰色	35	SS2
8	皿	－	(1.7)	(7.6)	ABEI	Ⅲ	黄灰色	20	SS2
9	皿	－	(1.6)	(6.0)	ABEIJ	Ⅲ	褐灰色	25	SS2
10	皿	－	(1.5)	(6.6)	BEI	Ⅰ	青灰色	35	SS2
11	皿	－	(1.2)	－	BEIJ	Ⅲ	褐灰色	10	SS2
12	蓋	－	－	－	BEI	Ⅰ	青灰色	5	SS2　つまみ径2.8cm
13	高台付瓶	17.0	5.4	8.6	BEHI	Ⅱ	淡灰色	50	SS2
14	高台付瓶	14.0	6.0	7.2	BEIJ	Ⅰ	青灰色	50	SS2
15	高台付瓶	14.3	6.7	7.1	ABEIJ	Ⅲ	黄灰色	70	SS2
16	高台付瓶	－	(4.5)	(7.8)	AEI	Ⅲ	褐灰色	20	SS2
17	高台付瓶	－	(1.9)	(7.2)	ABEIJ	Ⅲ	褐灰色	20	SS2
18	高台付瓶	－	(1.9)	(8.6)	BEHI	Ⅱ	淡灰色	20	SS2
19	高台付瓶	－	(2.0)	(6.9)	BEI	Ⅰ	青灰色	15	SS2
20	高台付瓶	－	(2.3)	(7.1)	BEIJ	Ⅰ	灰　色	40	SS2
21	高台付瓶	－	(2.9)	(6.2)	BEGI	Ⅲ	灰褐色	25	SS2
22	高台付瓶	－	(1.6)	(6.7)	BEIJ	Ⅰ	灰　色	25	SS2
23	鉢	(17.0)	(4.1)	－	BEIJ	Ⅰ	暗灰色	10	SS2
24	鉢	(20.0)	(5.5)	－	BEI	Ⅰ	暗灰色	15	SS2
25	鉢	(17.0)	(5.8)	－	BEHI	Ⅰ	灰褐色	15	SS2
26	壺	(22.0)	(8.8)	－	BCEI	Ⅰ	暗灰色	20	SS2
27	陶　錘	高 4.1	幅 1.8	厚 1.8	BE	Ⅰ	青灰色	95	SS2
28	平　瓦	－	－	－	ABE	Ⅲ	茶褐色	－	SS2
29	丸　瓦	－	(20.0)	－	BHI	Ⅰ	灰　色	－	SS2

第50図　第２号集積土壙・グリッド出土遺物（１）



第51図　第２号集積土壙・グリッド出土遺物（２）



須恵器蓋（12）

12は坏蓋で、擬宝珠つまみが付く。

須恵器高台付埦（13～22）

13は大口径で浅い高台付埦である。口径は17.0cmある。体部は丸みを帯び、口縁部は僅かに外反する。

14と15は体部の張りが弱く、口縁部が僅かに外反する高台付埦で、B1類に属す。口径は14cm前後であり、中型である。総じて高台の調整は丁寧で、端部に凹線が巡る。

須恵器鉢（23～25）

23はやや肩の張る鉢、24は撫肩の鉢である。口縁端部は上下に拡張され前者は凹面、後者は凸面をなす。25は頸部の屈曲が弱く、口縁端部は上下に拡張され、中間部に凸線が巡る。

須恵器甕（26）

26は長胴の平底甕となろう。口縁端部は上下に大きく拡張され、中間部に凸線が巡る。

陶錘（27）

27は直径2cmほどの錘で、棒に粘土を巻き付けてから両端を刀子で成形し、そのまま焼成することによって貫通孔を作る。焼成は須恵器と同じで、青灰色を呈する。

瓦（28・29）

28は平瓦の破片で、凸面に縄目叩き痕、凹面に布目がある。29は丸瓦の大型破片で、復元幅は14cmほどになろう。凸面は平行叩きの後、ヘラケズリを加えている。凹面には布目が付き、縁辺部を斜めにヘラで削り取って面取りを行っている。

（4） グリッド出土遺物

1は第3号溝出土の灰釉陶器皿である。胎土は黄色味のある灰白色を呈し、内面に灰釉をハケ塗りする。薄手で丁寧な作りであり、高台内を削り込んでいる。

2～10は第1号墳出土の古代遺物である。第1号窯の遺物が混入した可能性が高い。3は体部の張りの強い須恵器高台付埦である。第1号窯跡出土の坏C類と共通性が認められる。7～9は須恵器皿である。7は皿B1類に属し、口径が12.8cmで、小皿に相当しよう。8と9は皿A′2類に属し、中皿のなかで標準的なものと、やや大振りなものになろう。10は高台付皿となろう。高台は高く踏ん張りが強い。

11は第3号墳出土の長頸瓶底部である。厚みのある断面方形の高台が付く。

12と13は第4号墳出土の古代遺物である。12は須恵器坏B2類に属する。直口、深手の坏である。13は長頸瓶の底部である。

14～17は表面採集資料である。14と15は須恵器皿で、A′2類に属す。16は大甕の肩部で、外面は平行叩き、内面は同心円文当て具痕が残る。古墳に伴う可能性が高い。17は平瓦で、凸面は叩きの後、ヘラケズリを加える。凹面には布目が付く。

グリッド出土遺物観察表（第51図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	灰釉陶器皿	－	(1.7)	(7.6)	BC	I	灰黄色	5	SD3
2	坏	－	(1.5)	(5.7)	BEGHI	II	淡灰色	25	SS1
3	高台付埦	14.2	5.3	6.6	BCEI	I	青灰色	50	SS1
4	高台付埦	－	(2.0)	7.2	ABCE	III	褐灰色	50	SS1
5	高台付埦	－	(2.6)	6.5	BEGH	III	黄灰色	40	SS1
6	高台付埦	－	(1.5)	(6.1)	ABEG	II	暗灰色	20	SS1
7	皿	(12.7)	2.4	(6.0)	ACEI	II	淡灰色	10	SS1
8	皿	(13.8)	2.3	(6.0)	ABEIJ	III	褐灰色	20	SS1
9	皿	14.9	1.6	6.6	BEIJ	I	青灰色	25	SS1
10	高台付皿	－	(2.2)	7.1	BEGH	II	灰褐色	50	SS1
11	長頸瓶	－	(1.7)	(6.8)	BEHI	II	淡灰色	20	SS3
12	坏	－	(3.1)	(5.1)	BEHI	III	暗灰色	20	SS4
13	長頸瓶	－	(2.5)	(5.6)	BEH	II	淡灰色	15	SS4
14	皿	14.5	2.3	5.8	ABEI	III	褐灰色	40	表採
15	皿	14.3	2.6	(6.7)	BEHI	II	淡灰色	90	表採
16	甕	－	(5.1)	－	BEHI	II	灰色	－	表採
17	平瓦	－	－	－	ABDEH	II	淡灰色	－	表採

4．中世の遺構と遺物

（1） 溝

第1号溝（第52図）

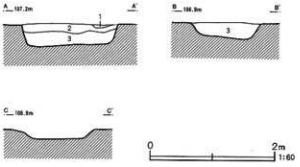
B・C・D－3グリッドに位置する。直線的であるが、僅かに歪みがある。走向はN－89°－Eである。両端とも調査区外に延びている。第4号溝と平行しており、北側に6.8m離れている。全長24.4m、幅0.96～1.60m、深さ0.18～0.36mを測る。断面形は逆台形である。覆土は上層が暗褐色土、下層が茶褐色粘性土で、遺物の多くは下層からの出土である。上下両層とも焼土粒子を含んでいる。第2号墳の周溝を切っている。

出土遺物は少量であるが、中世瓦質土器片がある。

1は須恵質に近い擂鉢の体下部である。指押えの後、外面は回転ヘラケズリ調整、櫛目は間隔の疎らな7条単位の工具で施す。使用による摩耗が進んでいる。

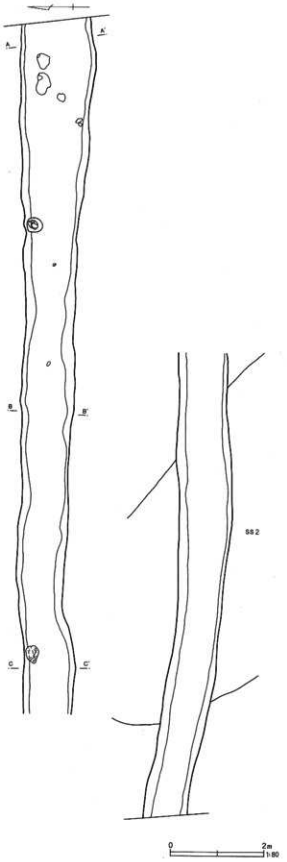
2は内耳土鍋の口縁部で、内湾気味に開く。端部は三角形に尖り、上面が内傾する。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデが施されている。

3は復元完形となる擂鉢で、焼成は酸化がかる。平底で、体部は直線的に開く。口縁端部は僅かに外側につまみ出し、上部に平坦面を持つ。体部外面の下半部には雑な回転ヘラケズリを施すが、上部にはロクロ目が巡る。内面を丁寧な横位ナデ仕上げの後、6条の櫛状工具で櫛目を交差させながら3工程施す。底部付近の内面は器面の摩滅が著しい。

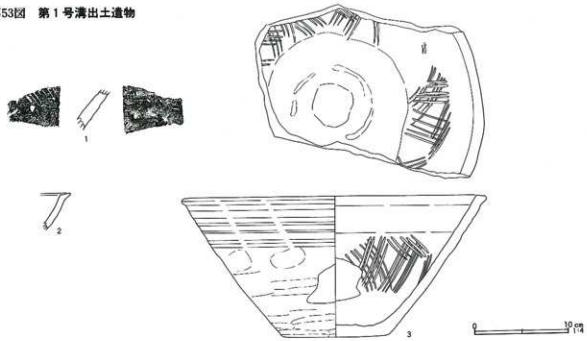


第1号溝
1　赤褐色土　焼土多量、炭化物少量。
2　暗褐色土　炭化物・焼土粒子、しまり強、粘性やや弱。
3　茶褐色土　小石多量、焼土粒子微量、しまり強、粘性強。（遺物大半出土）

第52図　第1号溝



第53図　第１号溝出土遺物



第１号溝出土遺物観察表（第53図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	擂　鉢	－	－	－	BGH	I	黄灰色	5	在地産須恵質
2	内耳土鍋	－	－	－	AEG	I	黄灰色	5	
3	擂　鉢	32.2	14.8	10.6	ABDEGI	III	褐　色	25	

第２号溝（第54図）

E・F・G－10、E－11グリッドに位置する。緩やかに蛇行しており、走向はN－74°－Eである。緩斜面を横断する形で掘削された溝である。両端とも調査区外に延びている。全長19.8m、幅0.56～0.96m、深さ0.15mを測る。断面形はU字形である。覆土は上層が暗褐色土、下層が茶褐色粘性土で、ともに焼土粒子を含んでいる。第３号溝を切っている。

実測図を掲げられなかったが、出土遺物に少量の中世土器片がある。

第３号溝（第55図）

D・E－6・7、E－8・9・10・11・12グリッドに位置する。直線的な溝であり、走向はN－4°－Wである。両端とも調査区の外側に延びている。中程より少し南側に一ヶ所の折れがある。全長54.72m、幅2.16～2.80m、深さは確認面から0.45m、地山上面からは0.72mを測る。断面形はV字形である。折れの部分では、溝は２回直角に折れて４m西側に入り込み、同じ走向をとる。

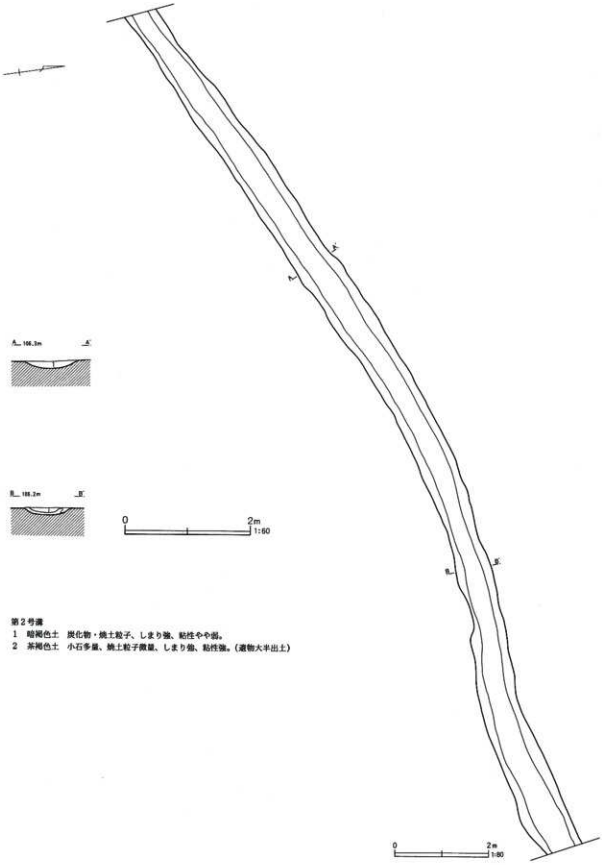
覆土は上層が小礫を多量に含む暗灰褐色粘性土、中層は人頭大の礫を多量に含む暗褐色土で、溝底直上には水の流れた形跡のある灰褐色砂質土が14cmの厚さで堆積していた。縦断土層断面によると、自然埋没ではなく、北側から順次埋め立てられた事がわかる。その土には人頭大の亜角礫を多量に含む。礫の分布は溝底から西側立上り部に顕著であり、溝の西側から投棄が行われたと考えらる。このことは溝を掘削したおりに、排土を溝の内(西)側に積み上げた土塁が同時に築かれ、再び、溝を埋め立てる際にそれが取り崩されて北側から順次埋め立てられた可能性が極めて高い。新旧関係は第２号溝に切られている。

出土遺物には中世の陶磁器、土器・瓦質土器がある。

１は小型のロクロかわらけで、坏形を呈する。体部は直立気味で、作りは薄手である。底部はやや厚く、上げ底である。内外面ともロクロ目が巡り、外底面には回転糸切り離し痕がある。

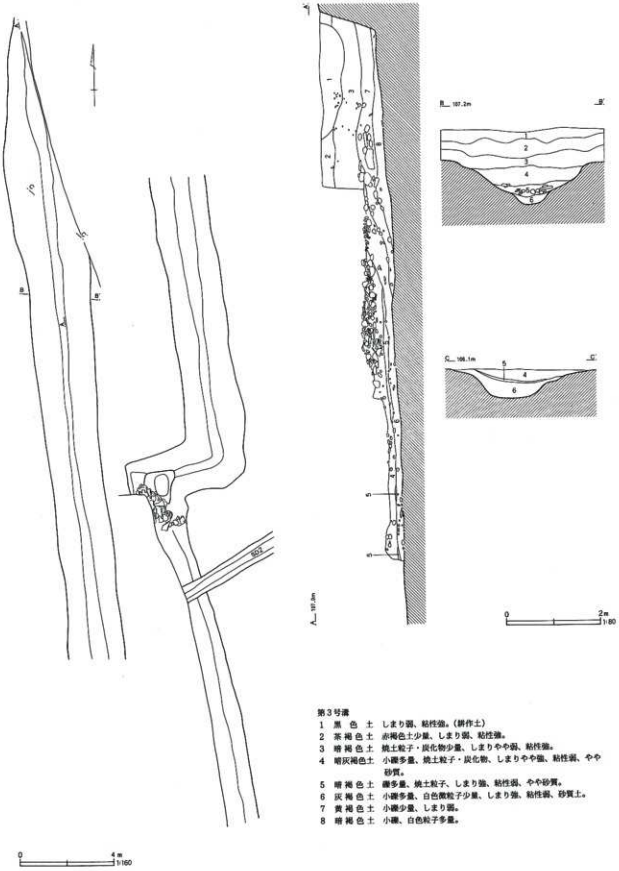
２は中国製の青磁輪花皿で、体部は強く外反して開く。内面口縁直下に三重の波線、その下に雲気文もし

第54図　第２号溝



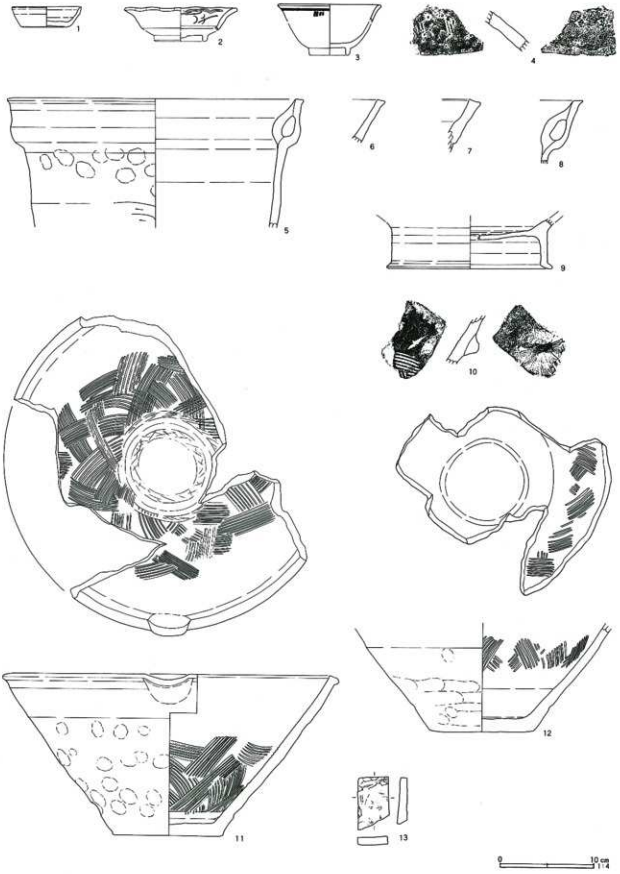
第２号溝
1　暗褐色土　炭化物・焼土粒子、しまり強、粘性やや弱。
2　茶褐色土　小石多量、焼土粒子微量、しまり強、粘性強。（遺物大半出土）

第55図　第３号溝



第３号溝
1　黒　色　土　しまり弱、粘性強。（耕作土）
2　茶 褐 色 土　赤褐色土少量、しまり弱、粘性強。
3　暗 褐 色 土　焼土粒子・炭化物少量、しまりやや弱、粘性強。
4　暗灰褐色土　小礫多量、焼土粒子・炭化物、しまりやや強、粘性弱、やや砂質。
5　暗 褐 色 土　礫多量、焼土粒子、しまり強、粘性弱、やや砂質。
6　灰 褐 色 土　小礫多量、白色微粒子少量、しまり強、粘性弱、砂質土。
7　黄 褐 色 土　小礫少量、しまり弱。
8　暗 褐 色 土　小礫、白色粒子多量。

第56図　第３号溝出土遺物



第３号溝出土遺物観察表（第56図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	かわらけ	7.4	2.1	4.8	BEGHI	I	橙　色	100	
2	青磁輪花皿	(12.0)	－	－	H	I	灰白色	15	釉色ライトグリーン
3	青花碗	(11.0)	－	－	H	I	灰白色	12	染付
4	甕	－	－	－	BCG	I	灰白色	5	常滑焼
5	内耳土鍋	(31.5)	(13.6)	－	ABEH	II	淡灰色	10	瓦質
6	内耳土鍋	－	－	－	ABGH	I	灰黄褐色	10	瓦質
7	内耳土鍋	－	－	－	ADGH	I	にぶい赤褐色	5	
8	内耳土鍋	－	－	－	AGH	I	明赤褐色	5	土師質、黒色処理
9	土器火鉢	－	4.8	(17.6)	ABCGHI	I	明赤褐色	25	土師質
10	擂　鉢	－	－	－	BCGH	II	灰黄褐色	5	在地産擂鉢、瓦質
11	片口擂鉢	35.6	17.1	11.8	ABCEG	II	にぶい褐色	70	
12	擂　鉢	－	(11.6)	11.0	BCEH	II	灰　色	50	瓦質
13	砥　石	長 5.6	幅 3.2	厚 1.0	－	－	浅黄橙色	－	凝灰岩製、重量30ｇ

くは唐草文かと思われる線彫りが施されている。釉色はライトグリーンである。

３は青花碗で、端反りの器形をもつ。外面口縁部直下に太い界線が巡り、その下に植物文かと思われる呉須絵付けがなされている。

４は常滑甕の肩部破片である。外面に押し型文がある。灰オリーブ色の自然釉がかかる。

５は瓦質の内耳土鍋である。体部は直立気味で、有段の口縁部が付く。体部外面は指押えの後、回転ヘラケズリを施す。内耳の環体は断面円形で、器壁がこの部分だけ窪む。器肉は全体に部厚い。

６から８は内耳土鍋の口縁部である。いずれも直線的に開く形態を取るが、器肉の厚いものと薄いものとがあり、端部の形状も四角と三角形とがある。

９は素焼きの土器火鉢で、高台部から底部にかけて残存する。内外面とも回転ナデ調整を施す。

10は瓦質の在地産擂鉢の体部破片である。外面に水平方向に取り付けた把手がある。内面には７条単位の工具による櫛目が交差するように施されている。

11は大型の片口擂鉢で、瓦質だが一部酸化がかる。平底をもち体部は直線的に開く。端部は外方につまみ出し、上部に平坦面を持つ。粘土紐巻上げ成形後、指押えを行い、外面口縁部直下を回転ヘラケズリ、底部脇は回転ナデを加える。櫛目は幅２cmで７条の櫛を用いて４工程施し、斜格子状を呈する。片口部は内側から押出して形作る。底部は静止糸切り離しする。

12は瓦質で、灰色を呈する。平底で器形は11と似る。体部外面は雑な回転ヘラケズリを施す。櫛目は９条の櫛を用いて４工程施すが、底部付近では使用による摩滅で消えている。

13は凝灰岩製の砥石である。下端を欠損し、下面も剥離している。上面には使用を示す細かい線状痕が認められる。側面は砥石製作時の擦り切り調整痕がある。肌目の細かい上質の砥石である。

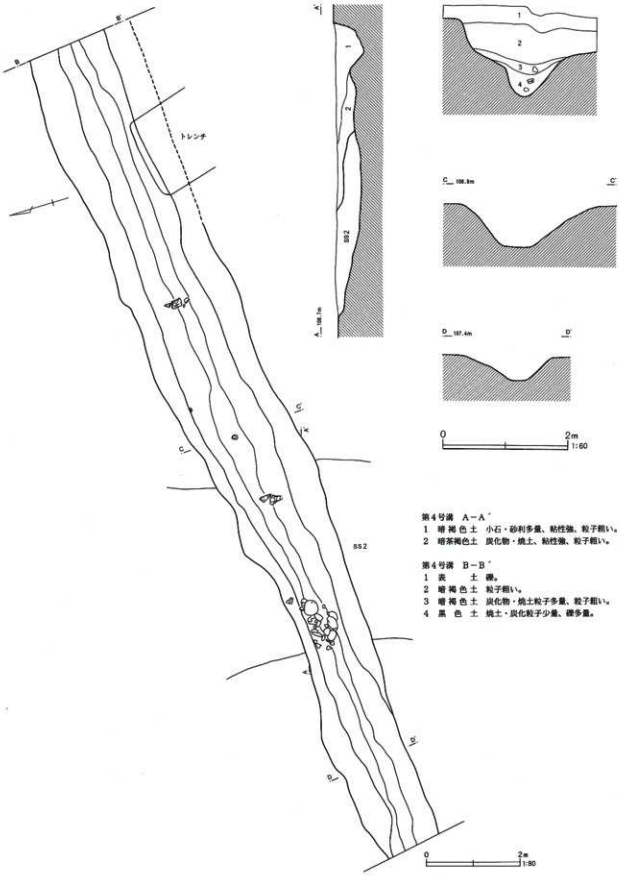
第４号溝（第57図）

Ｂ・Ｃ・Ｄ－４グリッドに位置する。直線的で、走向はＮ－86°－Ｅである。両端とも調査区外へ延びている。全長18.4m、幅1.52～2.32m、深さは確認面から0.72m、地山上面からは1.20mを測る。断面形はＶ字形である。覆土は上層、中層とも暗褐色土、下層は礫を多量に含む黒色土で、中下層には炭化物と焼土粒子を含んでいた。形状、規模、覆土とも第３号溝と近似しており、両者は同一の遺構と考えられる。調査区外に両溝の接続部の存在が推定可能であるが、溝の走向からすれば、ちょうど90°の隅角をなすことになる。第２号墳の周溝を切っている。

出土遺物には、中世の土器、瓦質土器がある。

１から５はロクロかわらけである。このうち２は底広の坏形を呈する。内外面にはロクロ目が巡り、外底面には左回転の糸切り離し痕がある。３も２に似た法量と器形を示すが、体部の開きが大きく、薄手で、口唇部は尖る。４も同類の底部とみられる。

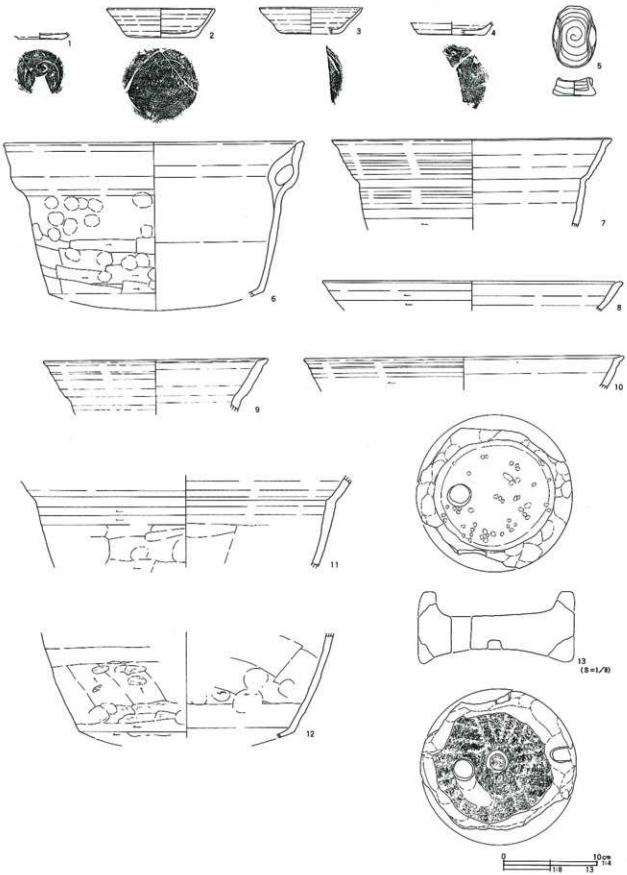
第57図　第４号溝



第４号溝　Ａ－Ａ´
1　暗褐色土　小石・砂利多量、粘性強、粒子細い。
2　暗茶褐色土　炭化物・焼土、粘性強、粒子細い。

第４号溝　Ｂ－Ｂ´
1　表　　土　礫。
2　暗褐色土　粒子細い。
3　暗褐色土　炭化物・焼土粒子多量、粒子細い。
4　黒　色　土　焼土・炭化粒子少量、礫多量。

第58図　第４号溝出土遺物



第４号溝出土遺物観察表（第58図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	かわらけ	11.5	3.1	7.4	AGH	I	橙　色	70	№5
2	かわらけ	(10.8)	2.8	(6.0)	BGH	I	にぶい赤褐色	20	
3	かわらけ	－	(1.4)	(7.0)	AGHIK	I	明赤褐色	20	
4	かわらけ	－	(0.7)	(4.6)	BGHI	I	明赤褐色	40	
5	耳　皿	3.7	1.9	3.4	ABCEG	I	橙　色	100	№4
6	内耳土鍋	(32.0)	(16.4)	(23.0)	ABEG	II	にぶい黄橙色	25	№1
7	内耳土鍋	(29.7)	(9.4)	－	ABGHM	I	にぶい橙色	10	
8	内耳土鍋	(36.0)	(3.2)	－	ABCEGHI	I	にぶい褐色	10	№4、在地産土鍋
9	内耳土鍋	(24.0)	(5.6)	－	ABEGH	I	にぶい橙色	10	
10	内耳土鍋	(34.0)	(3.5)	－	ABCGHI	I	にぶい橙色	10	№2
11	内耳土鍋	－	(9.7)	－	BGHI	I	灰　色	12	№1
12	内耳土鍋	－	(11.2)	(23.0)	HJ	I	にぶい橙色	15	№8
13	石　臼	－	幅33.2	厚11.8	－	－	暗灰色	90	上臼、安山岩製

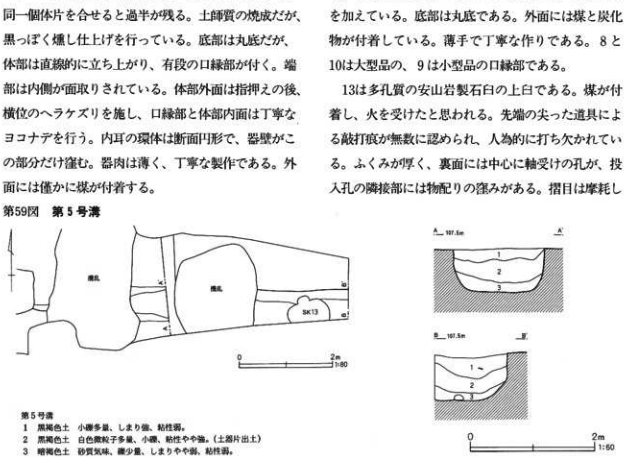
1は2から4よりも小型のかわらけで、外底面には左回転の糸切り離し痕がある。胎土に片岩を含み末野付近の産とみられる。5は耳皿である。ロクロかわらけの向い合う2個所を指で押しつぶしたものである。内外面にロクロ目、外底面に左回転の糸切り離し痕がある。これらは橙色もしくは明赤褐色を呈し、土師器と同様の焼成である。

6から12は内耳土鍋である。6は残存率が高く、同一個体片を合せると過半が残る。土師質の焼成だが、黒っぽく燻し仕上げを行っている。底部は丸底だが、体部は直線的に立ち上がり、有段の口縁部が付く。端部は内側が面取りされている。体部外面は指押えの後、横位のヘラケズリを施し、口縁部と体部内面は丁寧なヨコナデを行う。内耳の環体は断面円形で、器壁がこの部分だけ窪む。器肉は薄く、丁寧な製作である。外面には僅かに煤が付着する。

7は土師質の中型品で、内側に明瞭な段を形成する。体部外面は回転ヘラケズリ、口縁部外面にはロクロ目が巡る。内面は丁寧な回転ナデを施す。11は大型品であるが7と同様の器形を示す。粘土紐巻き上げ成形、指押えの後、体部外面は回転ヘラケズリ。内面は布を伴う横位ナデ、口縁部はロクロ目が巡る。胎土に片岩を含んでいる。12は大型品の体部から底部破片である。体部外面は斜位ヘラケズリの後に回転ヘラケズリを加えている。底部は丸底である。外面には煤と炭化物が付着している。薄手で丁寧な作りである。8と10は大型品の、9は小型品の口縁部である。

13は多孔質の安山岩製石臼の上臼である。煤が付着し、火を受けたと思われる。先端の尖った道具による敲打痕が無数に認められ、人為的に打ち欠かれている。ふくみが厚く、裏面には中心に軸受けの孔が、投入孔の隣接部には物配りの窪みがある。摺目は摩耗し

第59図　第５号溝



第５号溝
1　黒褐色土　小礫多量、しまり強、粘性弱。
2　黒褐色土　白色微粒子多量、小礫、粘性やや強。（土器片出土）
3　暗褐色土　砂質気味、礫少量、しまりやや弱、粘性弱。

ているが、極めて目が粗い。側面には柄の打込み孔が2個所あり、90度をなしている。孔の断面形は横長長方形である。

第5号溝（第59図）

D・E－1グリッドに位置する。近代以降の攪乱で著しく破壊されており、全容がつかめないが、西側へは延びず、東側は調査区外へ延びているようである。残っている部分からすると直線的であり、走向はN－88°－Wである。全長13.36m、幅1.44m、深さ0.69mを測る。断面形はU字形である。覆土は上層と中層が黒褐色土、下層が暗褐色土で、上層には礫が多く、土器片も包含されていた。第6号墳周溝を切っている。

遺物は図を掲げられなかったが、わずかな中世土器片がある。

（2） 井戸跡

第1号井戸跡（第60図）

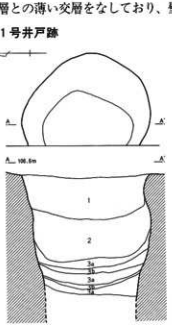
本井戸はB－6グリッドに位置する。一部が調査範囲外にあり、全体の四分の三ほどを調査した。平面形は円形を呈する。素掘り井戸である。規模は上場の直径が2.1mで、深さ1.9mまで調査した。

覆土は、下部の厚さ0.6mの部分が黄褐色粘土層と灰色砂質土層との薄い交層をなしており、壁の自然崩壊土と判断された。その上層は炭化物を含む粒子の粗い褐色粘性土で、厚さは0.6mある。最上層は焼土が充満しており、厚さは0.66mある。焼土ブロックの廃棄されたものであり、火災に遭った建物の壁土であった可能性が高い。その下の第2層も、板や柱の焼け残り状態のものが含まれていたので、火事場整理が行われたと考えて誤りないであろう。

出土遺物は少量であるが、中世瓦質土器の破片が出土している。1は内耳土鍋で、口縁部は体部から「く」の字状に屈曲して開く。端部は三角形に尖り、上面が内傾する。外面は回転削り、内面は丁寧な回転ナデが施されている。

2と3は擂鉢である。このうち3は一部酸化のかかった瓦質土器で、粘土紐を巻き上げて成形し、指押えの後、体部外面を斜めにヘラケズリ調整する。口縁部外面は回転ナデ、内面はミガキに近い丁寧なナデ仕上げが行われている。櫛目は8条単位の工具で交差させるように施す。櫛目は比較的上部まで及んでいる。外面に煤が付着しており、火事で焼けて井戸に廃棄されたものと考えられる。3は2とは別個体である。櫛目は7条単位の工具で交差させるように施されている。

第60図　第1号井戸跡



第1号井戸跡
1　焼土層
2　褐色土　炭化物、粒子粗く、粘性強。
3a　黄褐色土　粘土層。
3b　灰色土　砂質土層。

（3） 土　壙

第7号土壙（第63図）

本土壙はF－9グリッドに位置し、2区南側に存在する。平面形は円形を呈する。規模は0.87m×0.86mで、深さ0.3mである。断面形は不整逆台形である。

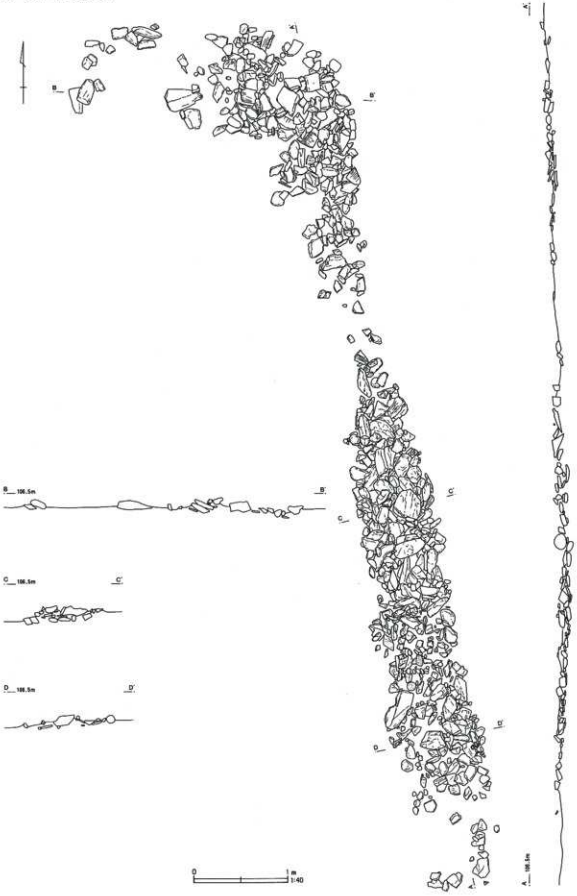
覆土には炭化物と焼土を含む。覆土中位から長さ10cmほどの偏平な礫1点と、かわらけ1点が出土した。かわらけはやや上げ底気味で、体部は直線的に開く。内外面にはロクロ目が明瞭で、外底面には回転糸切り離し痕が残る。口縁部は欠失している。

（4） 石敷き列

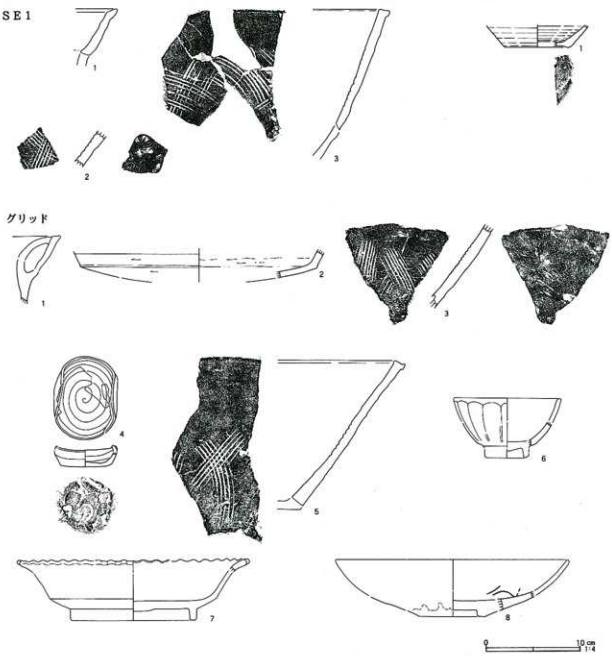
第1号石敷き列（第61図）

C－4・5、D－5グリッドに位置する。地山面に人頭大の石が敷き詰められていた。石の大きさは平均で20から30cm、大きな石は長さが50cmほどあったが、その隙間を小さな石が埋めるような状態で検出された。

第61図　第１号石敷き列



第62図　第1号井戸跡・第7号土壙・グリッド出土遺物



第1号井戸跡・7号土壙・グリッド出土遺物観察表（第62図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	内耳土鍋	−	−	−	BEGIH	I	黄灰色	5	SE1
2	擂鉢	−	−	−	ABGHIJ	I	黄灰色	5	SE1
3	擂鉢	−	−	−	ABEGHI	I	灰褐色	10	SE1、瓦質、外面煤付着
1	かわらけ	−	(2.4)	(6.5)	BEG	I	灰褐色	25	SK7
1	内耳土鍋	−	−	−	AEGHM	I	灰黄褐色	5	
2	内耳土鍋	−	3.5	25.0	ABG	I	灰褐色	12	外面煤付着
3	擂鉢	−	−	−	ABCGHIJK	I	褐灰色	15	在地産土師質
4	耳皿	−	1.7	2.6	AEG	I	明赤褐色	50	土師質
5	擂鉢	−	−	−	BCGHIJ	I	黄灰色	10	在地産瓦質
6	青磁碗	(11.2)	(6.3)	(4.0)	H	I	灰白色	15	外面蓮弁文、釉色明緑灰色
7	青磁大皿	(24.0)	(6.3)	(12.0)	H	I	灰白色	5	釉色ライトグリーン
8	白磁大皿	(24.6)	(7.0)	(6.0)	H	I	灰白色	12	透明釉

円礫は稀で、多くは結晶片岩の偏平な割石であった。平面プランは鍵形で、N－12°－Wの走向をとり幅0.92m、長さ9.1mの直線部分と、その北端部で西側に屈曲する幅1.04m、長さ2.00mの部分からなる。その屈曲部の内角は105度あるが、西側の敷石の抜けが多いので、確定的なものではない。

縦断面図に示すように敷石の上面はほぼ平坦であるが、地形に従っており、北側が高く、南側では15cm前後低くなっている。この敷石の用途については、第1に道路の敷石、第2に建物の軒下に施設した雨落ち石の可能性が考えられ、その当否を検討すると、道路とするには踏みしめられた痕跡が薄く、上面が平坦でなく、その可能性は薄い。また、雨落ち石とするには建物の実在の根拠が乏しいことが問題となる。敷石列の内側には掘立柱が並んで検出されてはいないが、礎石建ちで、それが失われた可能性も考えうる。したがって、ここではいちおう、雨落ち石と推定しておくことにしたい。

敷石に混じって僅かな量だが、中世に属する可能性のある陶器類が出土している。切り合い関係では第1号窯灰原上の中世の堆積層直上に位置している。

(5) グリッド出土遺物

表土除去後のプラン確認時に、各種の中世遺物が出土している。また、第1号窯の灰原部分に攪乱混入したものもあった。グリッド番号の特定はないが、一括してここに報告する。

1と2は内耳土鍋である。1は外開きの口縁部に内耳の一部が残存する。環体の断面は偏平である。2は丸底の底部である。外面はヘラケズリ、内面は丁寧なナデが施されている。外面には煤が付着している。

3と5は擂鉢である。5は瓦質で、直線的に開く器形を呈する。粘土紐巻き上げ成形、指押え後、外面下半部に回転ヘラケズリ、上半部に回転ナデを施す。内面は丁寧なナデ調整後、6条単位の工具で櫛目を交差するように施している。3は土師質で、外面を雑なナデ、内面を横位ケズリ調整する。櫛目は8条単位の工具で交差させて施す。

4は土師質の耳皿である。ロクロかわらけの向い合う2個所を指頭で押しつぶして製作している。内外面にロクロ目が顕著で、外底面には左回転の糸切り離し痕がある。

6は中国製の青磁碗である。内湾器形を呈する。外面には片切り彫りの蓮弁文がある。釉色は明緑灰色で、厚く施釉された上品である。

7は中国製の青磁大皿である。体部が外反して開き、細かな波状口縁をもつ。小破片からの復元実測ではあるが、厚手であり、大型品であることは間違いない。

8は中国製の白磁大皿である。内湾器形であり、底部付近の厚みから碁笥底皿となろう。内面に劃花文がある。釉薬は透明で、底部は露胎である。

5．時期不明の遺構

(1) 土　壙

第1号土壙（第63図）

本土壙はC－3グリッドに位置し、2区北側に存在する。平面形は円形を呈する。規模は1.0m×0.88mで、深さ0.16mである。断面形は逆台形である。主軸方向はN－14°－Wを示す。覆土には微量の炭化物と焼土を含む。

出土遺物は皆無で、時期は不明とせざるを得ない。

第2号土壙（第63図）

本土壙はC・D－3・4グリッドに位置し、2区北側に存在する。平面形は円形を呈する。規模は1.05m×1.04mで、深さ0.15mである。断面形は逆台形である。主軸方向はN－38°－Eを示す。覆土には微量の炭化物と焼土を含む。

出土遺物は皆無で、時期は不明とせざるを得ない。

第3号土壙（第63図）

本土壙はD－4グリッドに位置し、第2号土壙の南東側に隣接する。平面形は円形を呈する。規模は1.0m×0.9mで、深さ0.12mである。断面形は逆台形である。主軸方向はN－62°－Wを示す。覆土には微量の炭化物と焼土を含む。

底面から長さ15cmの礫が出土したが、人工遺物は皆無で、時期は不明とせざるを得ない。

第４号土壙（第63図）

本土壙はＣ・Ｄ－４グリッドに位置し、第３号土壙の南西に隣接する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.34ｍ×1.1ｍで、深さ0.3ｍである。断面形はＵ字形である。主軸方向はＮ－78°－Ｅを示す。覆土には微量の炭化物と焼土を含む。

出土遺物は皆無で、時期は不明とせざるを得ない。

第５号土壙（第63図）

本土壙はＦ－８グリッドに位置し、２区南側に存在する。平面形は長方形を呈するが、調査区外へ延びており、全長は不明である。

規模は(4.7)ｍ×1.25ｍで、深さ0.12ｍである。断面形は逆台形である。主軸方向はＮ－58°－Ｗを示す。覆土には炭化物と焼土を含む。上層の色調が黒色で、硬く締まっているのは他の土壙の場合と異なるところであり、相対的な時期の古さを示すものであろう。

出土遺物は皆無で、時期は不明とせざるを得ない。

なお、溝の上端部となる可能性もある。

第６号土壙（第63図）

本土壙はＦ－８グリッドに位置し、２区南側に存在する。平面形は円形を呈する。規模は0.65ｍ×0.66ｍで、深さ0.49ｍである。断面形は方形である。径が小さい割に深い土壙である。覆土には炭化物と焼土を含む。

出土遺物は皆無で、時期は不明とせざるを得ない。

第８号土壙（第63図）

本土壙はＦ－８グリッドに位置し、第６号土壙の北に隣接する。平面形は円形と推定するが、調査区外へ延びており、全体の50％ほどの調査である。規模は1.75ｍ×（0.8）ｍで、深さ0.23ｍである。断面形は逆台形である。

出土遺物は皆無であり、時期は不明とせざるを得ない。

第９号土壙（第63図）

本土壙はＢ・Ｃ－２グリッドに位置し、２区の最北端に存在する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.3ｍ×1.1ｍで、深さ0.09ｍである。断面形は皿形である。主軸方向はＮ－53°－Ｅを示す。覆土は砂を含む粘性土であった。

出土遺物は皆無であり、時期は不明とせざるを得ない。

第13号土壙（第63図）

本土壙はＥ－１グリッドに位置し、１区東部に存在する。平面形は円形を呈すると推定するが、調査区外に延びており、全体の50％ほどの調査である。

第５号溝と僅かに重複しているが、新旧関係の確認はできなかった。規模は1.45ｍ×（0.78）ｍで、深さ1.0ｍである。断面形は逆台形である。

覆土は４層に分層でき、下部の２層はしまりが悪いのに対して、上部の２層はしまりが強く小礫を多量に含んでいた。

第４層と第１層から長さ15cm前後の礫が合計３点出土している。埋め戻しの状況は墓壙に似るが、人骨は検出されなかった。人工遺物は皆無であり、時期は不明である。

第16号土壙（第63図）

本土壙はＣ－２グリッドに位置し、２区北端部に存在する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.28ｍ×1.13ｍで、深さ0.25ｍである。断面形は逆台形である。主軸方向はＮ－90°－Ｗを示す。

出土遺物は皆無であり、時期は不明とせざるを得ない。

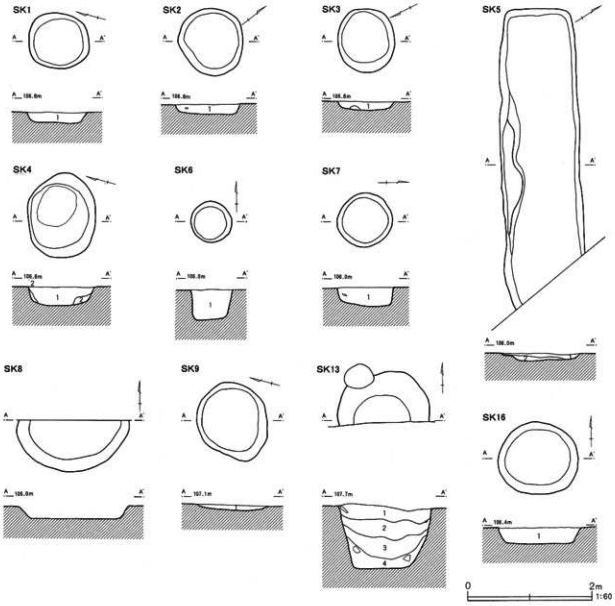
（２） ピット

第１～４号ピット（第４図）

２区北部のＣ－３・４グリッドから合計４基のピットが検出された。いずれも直径0.20ｍ、深さ0.30ｍほどの円形ピットであり、柱穴の可能性が考えられるが、配列に規則性はなく、掘立柱建物を復元するには不十分であった。遺物を伴っておらず、時期も不明である。

かりに、これらが同一遺構であったとすれば、第１号溝を跨ぐこととなるので、同時存在は考えられないことになる。したがって、方形区画溝で囲まれた中世の屋敷に伴う建物となる可能性は低い。

第63図　第1～9・13・16号土壙



第1号土壙
1　暗灰褐色土　砂利多量、炭化物・焼土微量、粒子粗く、粘性強。

第2号土壙
1　暗灰褐色土　砂利多量、炭化粒子・焼土微量、粒子細く、粘性強。

第3号土壙
1　暗灰褐色土　砂利多量、炭化粒子・焼土微量、粒子粗く、粘性強。

第4号土壙
1　暗灰褐色土　砂利多量、炭化粒子・焼土微量、粒子粗く、粘性強。
2　淡黄褐色土　焼土粒子微量、粒子細かく、粘性強。

第5号土壙
1　黒　色　土　炭化物・焼土、固くしまった層。
2　褐　色　土　炭化物・焼土、粒子粗い。

第6号土壙
1　暗 褐 色 土　炭化物・焼土、粒子粗い。

第7号土壙
1　暗 褐 色 土　炭化物・焼土、粒子粗い。

第9号土壙
1　暗 褐 色 土　砂質、粘性強。

第13号土壙
1　灰 黄 褐 色 土　小礫多量、炭化物・焼土粒子少量、しまり強、粘性弱。
2　暗　褐　色　土　白色粒子・小礫多量、しまり強、粘性ややあり。
3　暗　褐　色　土　小ブロック状褐色土多量、しまりやや弱、粘性強。
4　にぶい黄褐色土　砂質気味、炭化物、しまり弱、粘性強。

第16号土壙
1　暗褐色土　やや砂質、小石多量、しまり弱。

V　まとめ

1．箱石第1号窯と工房等出土土器の編年

箱石遺跡の第2・4次調査で検出された古代土器についてまず、型式学的な検討を行って遺構の先後関係を推定し、次に先学の編年案等を参考にして、その時間的位置付けを試みることにしたい。

(1)　箱石遺跡古代土器の連続編年

第1段階（第2号集積土壙）

高台付椀は体部下位に張りがあり、口縁部が緩やかに外反するものが主体で、口径は14cm代前半を測る。広口の大型品(13)も客体的に存在する。高台はハの字状に開き、断面形は矩形を呈し、端面に凹線が巡る。高台径は口径の1/2前後である。皿は体部に丸味のある皿Aと直線的に開く皿Bとがあり、共に坏を浅くした器形である。皿Aには口縁部が水平に開くものが存在する。蓋がわずかに残存している。

第2段階（第1号窯）

高台付椀は腰が張り、口縁部が端反りするもの(椀A)と体部が張らずに直線的に開き、口縁部が僅かに外反するもの(椀B)とがある。共に前期との連続性を認めうる。しかし、高台は低くなり、径が口径の1/2を下廻る個体が混在し始める。坏は椀Aを浅くした形態のものと、体部が僅かに張り、口縁部が緩やかに外反するもの(坏A)が主体だが、口縁部が直線的に開き、逆台形を呈する(坏B)も客体的に存在する。口径は14cm前後の個体が多く、底径は口径の1/2を少し下廻っている。皿は皿Aと皿Bが共存する。皿Aの口縁部が水平に開くものが主体だが、B類には体部が外反する深いものと、口縁部が水平に開き浅いものに大別される。法量的には口径14cm前後の中型品と16cm前後の大型品とがある。その他として鉢、壺があるが、第1段階と比較すると、口縁部の拡張の進行と、広口壺口縁部の開き方の変化が認められる。

第3段階（第1号集積土壙）

高台付椀は前期と比べて大型化(口径16cm前後)し、口径13cm代の小型品と、口径17～18cmの大型品が加わり、法量分化が確認される。椀Aは消滅し、椀Bのみとなる。器形は体部の開きが大きくなり、高台径の小型化が進行する。高台はハの字状に開き、断面逆台形の低いものに統一される。坏は直線的に開く坏Bが消滅し、坏Aのみとなる。第2段階と比べて法量の縮小化が顕著である。口径は12～13cmのものが主体的であり、底径は口径の1/2を大幅に下廻る。鉢は口縁部の拡張がさらに進行する。

第4段階（第3号住居跡）

高台付椀は再び元の法量に戻る。体部の僅かな張りは上部に移る。高台は極端に低くなり、断面逆三角形を呈する。底部外側に高台を貼り付けて、高台径を広くするものが現われる。坏は底径の小型化が進み、器高の高いもの(4)が出現する。皿は12のように底径の目立って小さいものが混在する。土師器甕には武蔵型のコの字状口縁甕中期のものがある。

第5段階（第2号住居跡）

高台付椀は器高を減じ、高台付坏に転換する。薄手の通常品と厚手の粗製品とがあり、前者の高台は断面逆三角形、後者は不定形を呈する。土師器甕にはコの字状口縁末期の甕とくの字状口縁の丸甕とがある。

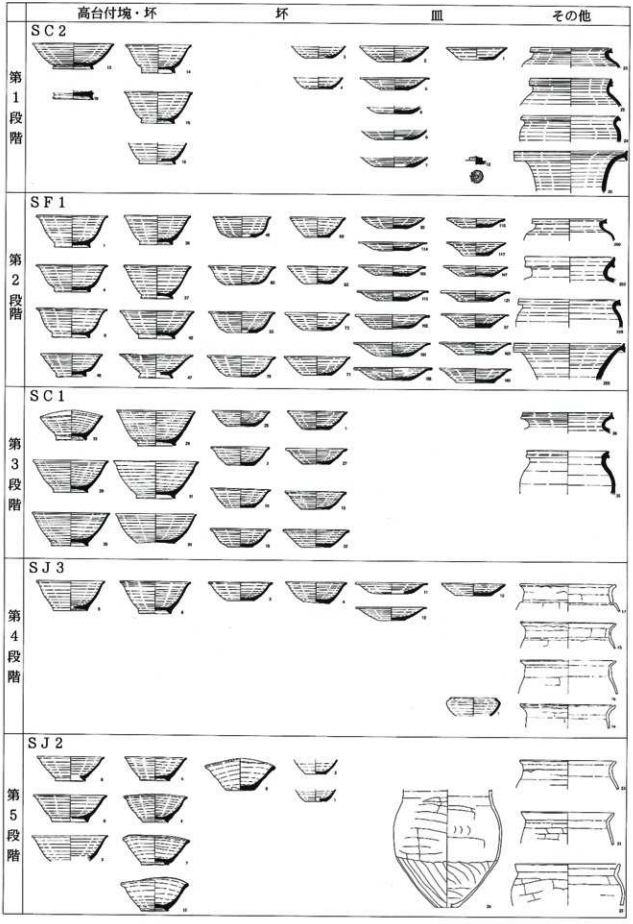
(2)　9世紀後半を中心とする末野窯産須恵器の編年

前節で前後関係を推定した土器群は、地域の編年の枠内ではどのような位置付けが可能となるのか。酒井清司氏による埼玉県の須恵器編年を骨組とし、その後に追加された良好な資料を加えた上で、箱石遺跡出土土器の相対的な位置付けを明らかにしたい。扱う時期は9世紀後半を中心とし、その前後の時期を加える。

第1期

高台付椀(1)は高台径が大きく、高い。後半期には端反りのもの(5)が登場する。坏は体部に、丸味があり口縁部が緩やかに外反する坏Aと体部が直線的に開き逆台形をなす坏Bとがある。坏Bは底径が大きいが、坏Aは口径の約1/2である。後半期には皿が出現する。

第64図　箱石遺跡土器変遷図（1：8）



体部に丸味のある皿Aのみで、外反して開く皿Bは出現していない。短い縁の付く蓋が盛んに生産されている。正龍寺窯採集品が該当し、酒井氏は8－A－5号窯を9世紀第2四半期の前半に充てる。8－B－2号窯は後出であり、同期の後半に充ててよいであろう。

第Ⅱ期

末野窯の特徴と言われる器面のロクロ目が目立ってくる。高台付碗は高台部が高く、端面に凹線の巡るもの(10)が残存する。口径14cm前後の中型品に、口径17cmの広口大型品が加わる。坏は坏Aと坏Bとがあるが、底径が幾分小型化する。皿Aは口縁部が水平に開く器形変化が生じる。皿Bは少し遅れて、口縁部の水平に開くものが登場する。蓋は大型の高台付碗に伴うものが少数残るのみとなる。箱石遺跡第2号集積土壙と沼下遺跡7号住居跡が該当する。酒井氏は若宮台44号住居跡出土の天安二年銘紡錘車を根拠として沼下7号住居跡を9世紀第3四半期に充てる。第Ⅲ期との関係から、その古い時期とすることが可能であろう。

第Ⅲ期

高台付碗、坏、皿の三者が銘々器として均衡的に使用される。高台付碗は、法量分化して、大型品と小型品が加わる。器形的には、前期の端反りの傾向がさらに強まり、腰が張りやや浅く変化するもの(21)と、体部の張りが弱まり深くなるもの(22)とが共存する。坏は前代からの坏A、坏Bのほかに端反りするもの(23・29)が加わる。口径は14cm強あり、腰が張り底径も大きい。台耕地第77号住居跡出土品は箱石第1号窯から供給された可能性がある。皿は口縁部が水平に開く皿Aと体部の外反する皿Bが双方に存在し、器形も類似する。後出であることが確かな箱石第1号集積土壙では端反りの碗は消滅している。箱石遺跡第1号窯、台耕地遺跡第77号住居跡、箱石遺跡第1号集積土壙が該当し、前二者がやや古い。酒井氏は台耕地遺跡第77号住居跡にK90号窯式の灰釉瓶が伴うことを根拠に9世紀第3四半期の新しい時期を充てている。

第Ⅳ期

高台付碗に低器高化して高台付坏との差が小さいものが現れる。高台も極端に低い。坏は器高が大きくなり、底径の小型化が進む。皿も器高が高く底径の小さいものが現れる。碗と坏は体部がくびれて口縁部が外反する器形を示す。箱石遺跡第3号住居跡と沼下遺跡8号住居跡が該当するが、後者は、坏と皿を欠いており、供膳器として高台付碗が専ら用いられた可能性が高い。9世紀第4四半期の古い時期を充てる。

第Ⅴ期

高台付碗の内、中型品の小型化と低器高化が進む。坏に高台を付したものが出現しており、高台付坏とした方がよいものもある。供膳器の中で坏と皿が減少する。坏は底部が小型化し器高が高くなる。皿は全く持たない住居跡が少なくない。中山遺跡1号住居跡、箱石遺跡第2号住居跡、折原窯跡が該当する。9世紀第4四半期の新しい時期を充てる。

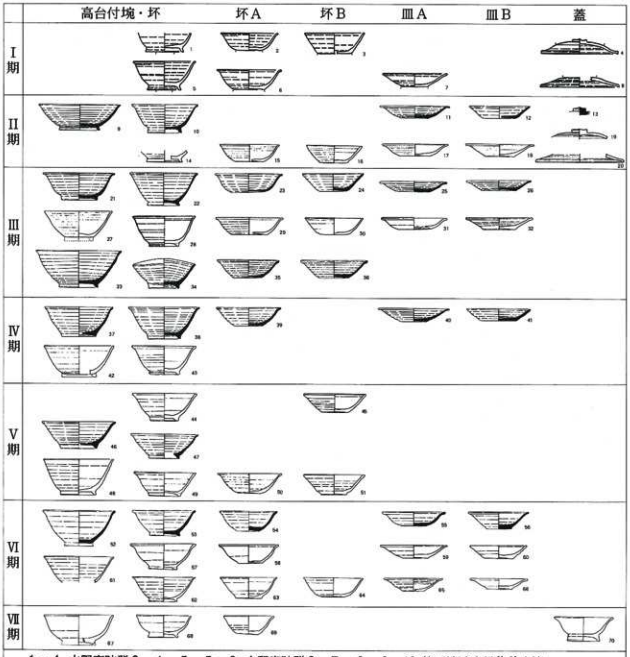
第Ⅵ期

高台付坏が供膳器の主役となる。器形的にも坏との互換性が顕著である。Ⅳ・Ⅴ期に行われた底部外側に付ける断面逆三角形の高台は姿を消し、再び高台径が小さくなると共に、体部上位に張りのある器形となる。口径15cm前後の高台付碗が僅かに残存する。坏は口径12cm以下のものが主体であり、小型化が明瞭となる。皿は極めて客体的となり、小型化が顕著である。桜沢2号窯、台耕地78号住居跡、折原石道遺跡3号住居が該当する。台耕地78号住居跡に酒井氏は9世紀第4四半期から10世紀初頭を充て、利根川氏は同時期を折原石道遺跡3号住居跡に付す。昼間孝志氏は桜沢窯跡に10世紀初頭を充てる。前後の関係から、ここではⅦ期に10世紀第1四半期の古い時期を充ててておきたい。

第Ⅶ期

高台付坏が供膳器の中心で、坏がこれを補完する。碗と皿は消滅した可能性がある。高台付坏は口径12cm前後と急激な小型化を示す。器形は腰折形の特徴的なものとなる。口径15cm近い大型品も同一器形を示す。ロクロ目が弱く広いのが特徴であり、折原窯系であろう。酸化焔焼成品の割合が高く、足高高台の付く

第65図　9世紀後半を中心とする末野窯産須恵器編年図（1：8）



1～4　末野窯跡群８－Ａ－５、５～８　末野窯跡群８－Ｂ－２、９～13 箱石遺跡２号集積土壙、
14～20 沼下遺跡７号住居跡、21～26 箱石１号窯跡、27～32 台耕地遺跡77号住居跡、
33～36 箱石遺跡１号集積土壙、37～41 箱石遺跡３号住居跡、42・43 沼下遺跡８号住居跡、
44・45 中山遺跡１号住居跡、46・47 箱石遺跡２号住居跡、48～51 折原窯、52～56 梅沢２号窯跡、
57～60 台耕地遺跡78住居跡、61～66 折原石道遺跡３号住居跡、67～70 折原石道遺跡１号住居跡

坏(70)や羽釜が加わり、コの字甕が完全に姿を消す。折原石道遺跡１号住居跡が該当する。利根川氏は10世紀第１四半期を充てる。ここでは、前期との関係で10世紀第１四半期の新しい時期を充てておきたい。

なお、折原石道遺跡では後続する時期に簡単な野窯で各種のロクロ土器生産が開始される。箱石遺跡第１次調査においても古墳周溝内の窟地に土器焼成遺構が築かれ、赤焼きの高台付坏が主に焼かれていた。両者は共通性が強く、ほぼ同時期とみてよいだろう。その時期は10世紀第２四半期頃であり、この頃、急速に末野窯跡群における須恵器生産が衰退していったことを示している。

2．箱石館跡と末野中世遺跡群について

（1） 箱石館と藤田氏館の構造及び規模

箱石遺跡の第３号溝と第４号溝は同一の遺構で、調査区外において直角に曲がるとみて良い。断面Ｖ字形で、上幅が２ｍから３ｍ弱、深さは1.20ｍ弱で、さほど大規模な溝ではないが、廃絶時に埋め立てられた礫を大量に含む土砂から、内側に土塁が築かれていたと推定できる。両者を併せた時には２ｍを超える比高差が確保されるので館の外郭溝として、一定の防御機能を認めることができよう。南北方向に延長54.7ｍを調査し、さらに調査区外に延びていることが確認されたが、荒川の崖線に迫っているので、多少の控えを考慮すると、90ｍ前後の規模が想定できよう。東西方向の復元規模は後述する藤田氏館との関係から、75ｍ前後となろう。主軸方向はＮ－４°－Ｗである。東辺の溝の南よりに折れが存在するのは、横矢掛けを配慮したもので、門が付近に存在した可能性もある。また、方格溝の北側には幅1.5ｍ前後、深さ0.4ｍの第１号溝がほぼ平行して掘削されており、出土遺物から同時期の遺構とすることができる。この溝は規模や断面形から見て区画か排水に関わるものであろう。

方格溝の内側には同時期の建物跡は確認できなかったが、調査区の西端から溝と同時期の井戸が検出されている。生活空間はこの井戸の西側調査区外に広がっていたとみられよう。この井戸には焼け残りの建築材や焼土と化した壁土が大量に投棄されており、火事場整理が行われたと考えうる。

これらの遺構は一体をなしており、出土遺物から見ても中世の武士階級の居館跡と考えて誤りないものと判断されるので、遺跡名をとって箱石館跡と呼称することにしたい。

さて、この箱石館跡の西側隣接地（字東日山）には伝藤田氏館跡が遺存しており、両者の関係が問題となる。現地踏査したところ、館跡内にある鈴木秀男氏宅の裏手に土塁の一部が残存しており、その外側には幅３ｍ、深さ1.5ｍほどの河川（宿川）があって水が流れている。土塁と川を併せた比高差は３ｍほどある。宿川は土塁残存部の50ｍほど先で直角に曲がって荒川に落ちているが、玉淀ダムの建設排土によって埋め立てられ、暗渠となる以前は大きな谷を形成していたという。また、60ｍほど西側の鈴木宜良氏宅裏手には近年まで土塁が鍵の手状の形で残存していたという。ここを土塁の隅角部とすると、館の規模は土塁の外側で109ｍ前後となり１町四方に相当する可能性が高い。

いっぽう、館の西側には直線的に走る道路があるが、土塁の方向と正確に直交しており、西側土塁外側の推定ラインと約15ｍ離れて併走している。この道路は周辺よりも少し低くなっており、堀跡を反映する古い地割りと見られた。これらの所見を総合して藤田氏館を復元してみたのが第66図である。現在宿川は護岸されて幅が狭まっているが、かつてはもっと川幅もあり、水量も豊かであったと思われる。また、東北の隅角部付近においては北から流下する少林寺川が合流しているので、宿川の水と併せ、これを堰で水量調整すれば水堀として十分機能したであろう。このことから藤田氏館を囲む方格堀にはその水が引き入れられていたとみて誤りないであろう。館の主軸方向はＮ－10°－Ｗである。

この藤田氏館と箱石館を比較した場合、まず、郭の面積では100：57の差がある。次に郭を取り巻く防御施設である堀と土塁については、前者は幅15ｍ前後の水堀が推定されるのに対して後者は幅３ｍの空堀であり、大きな質的格差が存在する。また主軸方向にも相違が認められるので、両者が一体をなして複郭式城郭となる可能性は極めて低いように思われる。やはり、藤田氏館跡は単郭式の巨大な館とみるのが妥当であり、堀構えの充実ぶりから見て、中世のある時期における藤田氏本宗の居館であった可能性はきわめて高いであろう。

同時代性が保証されていないので可能性としての論議となるが、箱石館は藤田氏館に近接して築かれていることをもってすれば、藤田氏と近親関係を保有していたか領主館防備の役割を負わされていたかが、ただ

ちに考えられる所であり、藤田氏の身内人か重臣の居館の蓋然性が高いものと思われる。箱石館の西側は水堀で防御され、南側には荒川の深い峡谷を控え、さらに東側には130m離れて南流する別流の少林寺川が外敵の侵攻の障害となっている。領主館に次ぐ要害の地に所在していることが改めて確認される。藤田氏館の周囲三方をこのような館が囲っていた可能性も考えておいて良いかもしれない。

東国における方形館の成立期に付いては論争のあるところであるが、藤田氏館のような規模の大きい水堀を持つ場合、通説通り14世紀以降とするのが妥当であろう。問題はむしろ廃絶の時期であり、正規の発掘調査が俟たれるところである。

(2) 箱石館出土中世土器とその編年的位置づけ

箱石館からはまとまった量の中世土器が出土している。その組成はかわらけの小皿と中皿、内耳土鍋、擂鉢を基本とし、若干の中国製磁器と耳皿、火鉢を伴う。内耳土鍋と擂鉢の胎土には砂粒の含有が多く、結晶片岩を含むものがあるので、本当の意味での在地産(荒川沿い)であり、当地末野で生産されていた可能性が高い。

それぞれの特徴について簡略に述べると、かわらけは平底で逆台形状を呈し、体部が直線的に開くロクロ成形品である。内耳土鍋は丸底で、口縁部が直線的に開き、1対の釣手が内面に付く。擂鉢は平底で、体部が直線的に開き、口縁端部は平坦で、僅かに外側に摘み出す。片口の付くものがある。摺り目は、傾斜の異なる目を交互に付けて綾杉状をなす。内耳土鍋の焼成は基本的に土師質であり、燻べ焼による黒色仕上げを伴うものが多い。擂鉢は瓦質であるが、酸化がかる。

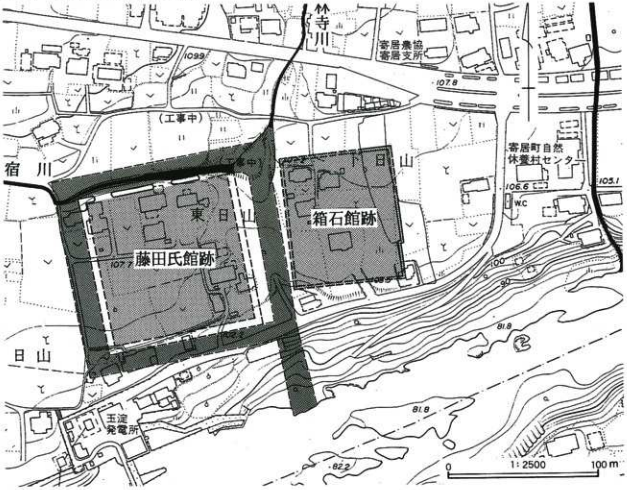
伴出した中国製磁器には14世紀末から15世紀中葉とされる端反りの染付碗B群(25)と青磁蓮弁文碗B群(28)、15世紀前葉から後葉とされる青磁稜花皿(24)、15世紀前半から中頃の出現で16世紀に多く使用されたとされる碁笥底の白磁皿E－3(30)などがあり、年代を知る手がかりに恵まれている。その年代の中心は15世紀中葉から後半にあることになろう。これらの中国製磁器は箱石館の主の身分表示となるものであるが、とくに初期の染付碗であるB群は青磁や白磁に比べて非常に少ないものであり、所有者の政治経済力の非凡さを反映する遺物といえる。

第68図は箱石館跡と周辺遺跡出土の15世紀後半を中心とする在地産中世土器を集成したものである。基本的な器種としてかわらけ、内耳土鍋、擂鉢を選んだ。

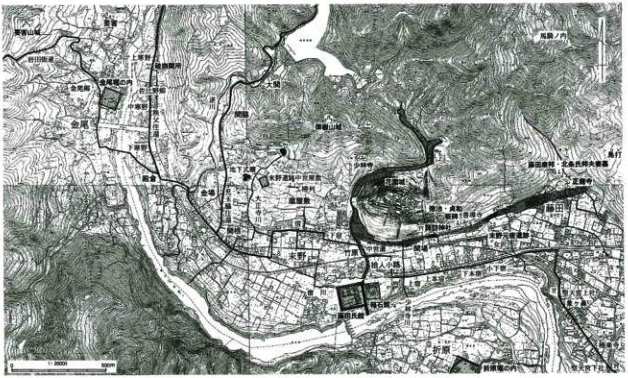
まず、内耳土鍋については、図に掲げたものは上野・武蔵型とされるもので、器壁が薄手であり、体部が直線的で、内耳が縦長になっている点などから、浅野晴樹氏編年の第Ⅳ期(15世紀後半)に相当しよう。底部は判明しているものはみな丸底である。群馬県における木津博明氏の編年では15世紀後半には丸底から平底に変化するとされるが、寄居周辺では15世紀後半に至っても丸底が優勢である。浅野氏によれば、鉄鍋の忠実な模倣が初期の段階以外にも断続的に行われた結果であろうという。末野元宿遺跡出土品(33)、末野遺跡F区出土品(34)、箱石館跡出土品(35・36)、城見上遺跡出土品(37)ほかかあり、器形・調整技法とも共通性が高い。なお、鉢形城では16世紀代に最古式の焙烙形の内耳土器(51)が登場する。

つぎに擂鉢に付いては、15世紀中頃から後半にかけて摺り目の無い片口鉢から擂鉢に転換するという浅野氏の指摘がある。そして、初期の擂鉢は浅く、口縁端部が内側に折れるものがあるのに対して、15世紀後半以降になると口縁端部が平坦になり、縁帯部に溝を持つようになるという。また、器高と口径の比が1対3ほどの偏平なものから、16世紀段階には1対2ほどの深めの形態に変化するという。これらの所見を参考にすると、箱石遺跡第1次調査区出土の片口鉢(42)は擂鉢出現以前の所産であり、口縁端部の形状から14世紀後葉頃に比定できよう。末野F区出土の擂鉢(43)は口縁端部が丸く収められており、神川町皂樹原遺跡出土の片口鉢と類似している。擂鉢としては初期のものであり、15世紀中葉に比定できよう。ところが、箱石館跡出土の擂鉢は口縁端部が平坦で器形が深く、器高と口径の比が1対2に近いので、浅野

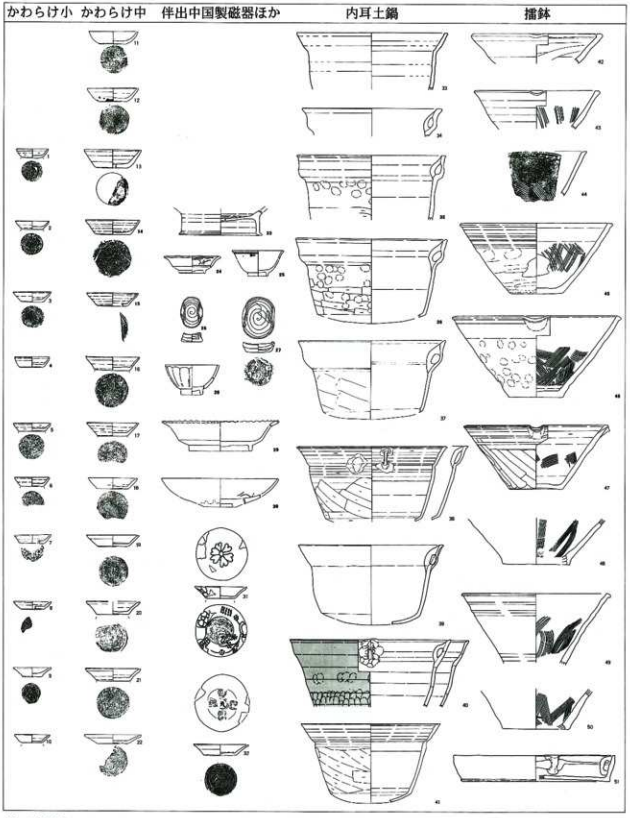
第66図　箱石中世館跡と藤田氏館跡



第67図　末野中世遺跡群



第68図　箱石館跡及び周辺遺跡出土の類似する在地産中世土器（1：8）



箱石館跡(4・14・15・23～30・35・36・45・46)　城見上遺跡(19・37)　末野遺跡Ｃ区(32)　箱石遺跡１次調査区(9・42・44)　末野遺跡Ｆ区東灰原跡(8・34・43)　末野元宿遺跡(33)　鉢形城二の丸(7・11 12・18・22・48～51)　児玉町城の内遺跡(1～3・5・6・16・17・21・38・41・47)　児玉町古井戸遺跡１号館(10・20・39)　児玉町古井戸遺跡２号館(31)　上尾市西通Ｉ遺跡(13・40)

氏の編年指標からすれば、16世紀まで下がる可能性がある。たしかに鉢形城二の丸出土の擂鉢(49・50)の場合、体部の立上り方が急であり、16世紀まで下降させて良いと思われるが、これらに比べると箱石館出土の擂鉢は開き方が相対的に緩やかであり、先行するとして良いであろう。また、大振りである点、片口を持つ点、瓦質である点などを加味するとやはり15世紀後半の内にとどまるものと思われる。摺り目にはバリエーションがあり、末野遺跡F区出土品は疎らな縦型、箱石館跡出土品は綾杉型、児玉町城の内遺跡と鉢形城出土品は鋸歯または花弁型である。

かわらけについては、浅野氏や田中信氏の編年研究の成果がある。基本的には13世紀後半以降、手捏ねのかわらけは消滅し、体部に丸みのあるロクロかわらけが15世紀前半まで残存するが、15世紀中頃以降、体部が直線的になる傾向があり、16世紀前半までの間に外反する形態変化を示すというものである。また、恋河内昭彦氏の検討によれば児玉町城の内遺跡では、口縁部の外反変換点は上半から下半へ漸移的に変化するという。箱石館と周辺部出土のかわらけを集成し、形式変化に沿った配列を試みたが、比較的スムーズにそれを行うことができた。鉢形城二の丸出土品(11・12)は体部が丸く、15世紀前半代となろう。箱石館跡出土のかわらけ(4・14・15)は逆台形を呈するもので、城の内遺跡出土品(5・6・17・18)と同じく15世紀中頃または後半の早い時期に比定できよう。これに対して、鉢形城二の丸出土品(18)と城見上遺跡出土品(19)は器高の低平化が看取され、いくぶん下降するように思われる。いっぽう、末野遺跡C区出土の地鎮祭祀に用いられたかわらけ(32)と箱石遺跡第1次調査区出土の小皿(9)は、児玉町古井戸1・2号館出土品(20・31)や児玉町城の内遺跡出土品(21)などと同じく、腰の部分から大きく外反しているので、15世紀末から16世紀前半に比定できよう。

以上行ってきた中世在地産土器の検討によって明らかになった点を簡条書きで掲げる。

1．箱石館跡出土土器の年代は伴出中国製磁器での検討結果と同じく15世紀中頃から後半となる。
2．末野中世遺跡群内では14世紀後葉から16世紀前半代までの中世土器が確認できる。
3．鉢形城においても15世紀前半代から16世紀に及ぶ中世土器が確認できる。
4．土器様相から見て15世紀後半を中心とする時期の寄居町と児玉町は強い共通性を有している。

今後の課題として、中世土器の生産と供給の問題がある。末野産の結晶片岩を含む土器がどのような範囲で流通していたかを調べることによって藤田氏の在地支配の実態が少しずつ明らかになっていくであろう。

(3) 末野中世遺跡群について

寄居町大字末野から藤田に及ぶ荒川左岸には中世在地領主藤田氏に関る山城、寺院、石造物等が濃密に分布している。わけても花園城は戦国期の大規模山城として著名であり、二重堅堀の特徴をもって藤田氏系山城の代表例とされる。また、その背景には御嶽山城があり、永禄五(1562)年には上杉憲政・長尾景虎連合軍の兵火を避けるために、当地の人々が籠城している。

平地に築かれた藤田氏館と箱石館は、これらの山城とどのような関係を有していたのか。箱石館は15世紀中葉から後半の存続期間が考えられたので、山城との間に前後関係の存在する可能性がある。しかし、花園城の遺構は最終段階の整備状況を示すものであって、築城時期は遡るとみた方がよい。その場合、15世紀までは居館と詰の城とが対で存在したことになろう。

城下には「拾人小路」・「竹原」の家臣団集住を推定させる地名が花園城と居館群の間に現存し、少しはなれて「蔵屋敷」・「殿倉」・「金場」の収税倉庫群、家政機関、武器武具製作工房を推量させる地名が残されている。字拾人小路の箱石遺跡第1次調査区で検出された掘立柱建物は武家屋敷の一部となる可能性があろう。また、字蔵屋敷地内の末野遺跡中世屋敷は蔵屋敷の政所に相当するか検討が必要となる。鍵手状に屈曲する旧秩父往還沿いに分布する多くの「宿」地名は果して町場を示すものなのか。藤田氏城下町については解明すべき課題が多い。

3．結　語

箱石遺跡第２・４次調査で検出された遺構と遺物について、明らかにできた点について時代別に簡略に纏めておきたい。ただし縄文時代については小結がなされているので、重ねて述べない。

古墳時代

墳丘を完全に削平された直径20ｍ内外の円墳群の周溝が部分的に検出された。合計５基あり、周溝の外側はわずか数ｍの距離で密集していた。このうち、第１号墳周溝からは大量の埴輪片が出土した。円筒埴輪は２条凸帯の小型品であり、第１凸帯の位置が器高の半ばとなる特徴のなもので、底部外面を板押圧する底部調整技法を伴っていた。形象埴輪には人物、馬、器財があり、特に靫形埴輪の個体数の多さが目立った。箱石Ⅰで報告された「箱石第１号墳」の靫形埴輪とは異なって、鎌身部を粘土紐で表現し、本体部に線刻文様は伴っていなかった。若干先行する可能性を認めうるが、円筒埴輪の特徴が共通するので、６世紀第４四半期に比定されるものとなろう。

また、第３号墳からは古墳に伴う須恵器提瓶と壺、甕が出土したが、末野窯跡群最古の第３号窯とほぼ同時期か若干先行する時期のものと推定される。箱石古墳群の被葬者層が末野窯跡群の開窯と深く関った人々であったことが想定されるところである。

古墳は９世紀以降、新時代の土地利用に供され、館築造時の15世紀には完全に削平されるに至った。

平安時代

第１号墳の周溝の窪地を利用して築かれた須恵器窯跡を箱石第１号窯と命名した。最大幅1.38ｍ、全長4.38ｍの小規模な窯であったが、碗と皿を中心に坏、鉢、甕、瓦、鬼瓦等も焼造していた。地域編年の中では９世紀第３四半期の新しい時期に比定され、花園町台耕地77号住居跡への供給も推定された。周辺にはロクロピットと粘土貯蔵穴を伴う第２号住居跡と他に２軒の住居跡が存在し、焼成失敗品を廃棄した土壙も２基検出された。これらの遺構は９世紀後半の約50年間にわたる須恵器工人の生産活動の跡と考えられた。

室町時代

中世居館の一部が検出され、箱石館跡と命名した。幅３ｍほどの方格溝を伴い、その内側には土塁が存在していた可能性が高い。推定規模は南北90ｍ、東西75ｍである。在地産のかわらけ、内耳土鍋、擂鉢、中国製の青花碗、青磁碗・皿、白磁皿などが出土し、15世紀中葉から後半の存続期間が推定できた。井戸内から焼け残りの建築材と壁土が出土しているので、火事場整理が行われたと考えられる。戦火による焼亡が廃絶の原因であった可能性もある。西側に伝藤田氏館が隣接する立地からみて、藤田氏の身内人か重臣の居館であった可能性が考えられた。

引用参考文献

赤熊浩一　1999『末野遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第207集
浅野晴樹・田中広明・藤原広幸他　1985『西通Ⅰ遺跡』上尾市文化財調査報告書　第22集
浅野晴樹　1991「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集
石塚三夫　1998『史跡鉢形城跡』平成９年度発掘調査概要報告　寄居町教育委員会
井上尚明　1986『将監塚・古井戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第64集
市村高男　1994「中世東国における宿の風景」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』中世の風景を読む　第２巻
上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』第２号
小野正敏　1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第２号
木津博明　1989「上野国に於ける在地生産土器に就いて」『中世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会
恋河内昭彦　1997「城の内・日延・東田・浅見境北遺跡」児玉町文化財調査報告書　第23集
酒井清治　1987「埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書』埼玉県立歴史資料館
谷井　彪・栗山欣也他　1988『埼玉の中世城館跡』埼玉県教育委員会
利根川章彦　1999『折原石遺遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第225集
西井幸雄・鈴木孝之・水井いずみ他　1999『城見上・末野Ⅲ・花園城跡・箱石』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第211集
昼間孝志　1994『桜沢窯跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第143集
福島正義他　1986『寄居町史』通史編　寄居町教育委員会
福田　聖　1998『末野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第196集